

理工系学生のための海外英語研修プログラム

(オーストラリア・モナシュ大学・夏)

日程：平成 27 年 8 月 29 日(土)~9 月 28 日(月)



目次/Table of Contents



1 派遣プログラムの目的、日程、参加者の紹介	3
1.1 日程	
1.2 参加者の紹介	
2 オーストラリアとメルボルンについて	5
2.1 オーストラリア	
2.2 メルボルン	
3 Monash University と Monash College について	14
3.1 Monash University	
3.2 Monash College	
4 英語研修プログラムについて	17
4.1 Monash English	
4.2 English for Engineering and Science	
4.3 日常生活での英語学習について	
5 Field Trip について	22
5.1 Wind Farm とは？	
5.2 Wind Farm について現地で伺ったお話	
5.3 Wind Farm についての感想	
6 Monash University 訪問について	24
6.1 Engineering Lecture について	
6.2 Tour of Monash Engineering Facilities	
6.3 Monash Motorsports について	
7 その他	29
7.1 メルボルンの町など	
7.2 ホームステイでの生活について	
7.3 メルボルンのコーヒー文化について	
8 所感	40



1. 派遣プログラムの目的、日程、参加者の紹介（執筆担当：濱村肇）

オーストラリアのモナシュカレッジで英語の研修を受け、実践的な英語力を身につける。さらに一般的な英語研修に加えて、理工学系の専門的な表現を学ぶプログラムや、モナシュ大学の学生との交流、ホームステイ等を通じて、自分に自信を持って英語でコミュニケーションをはかることができるようになることを目指す。なお、このプログラムは、グローバル理工人育成コース実践型海外派遣プログラムの一環としても実施された。

1.1 日程

月日	スケジュール	備考
2015/8/29(土)	成田空港 → 香港空港 → メルボルン空港	土曜日、日曜日は自由行動
2015/8/30(日)	メルボルン空港に到着後、各々ホームステイ先へ	
2015/9/1(火)～ 2015/9/25(金)	モナシュ大学 クレイトンまたはシティキャンパスにて授業を受講。	
	サブスケジュール	
2015/9/2(水)	Indigenous Cultural Activity & BBQ	
2015/9/4(金)	Meet and Greet Activity	
2015/9/10(木)	Bald Hills Wind Farm へのフィールドトリップ	
2015/9/18(金)	Engineering Activity day	
2015/9/24(木)	Oral Presentation	
2015/9/25(金)	Certificate Presentation	
2015/9/27(日)	クレイトンキャンパスに集合した後、メルボルン空港へバスで移動。	
	メルボルン空港 → 香港空港 → 成田空港	
2015/9/28(月)	成田空港に到着後、各自解散。	

1.2 参加者の紹介

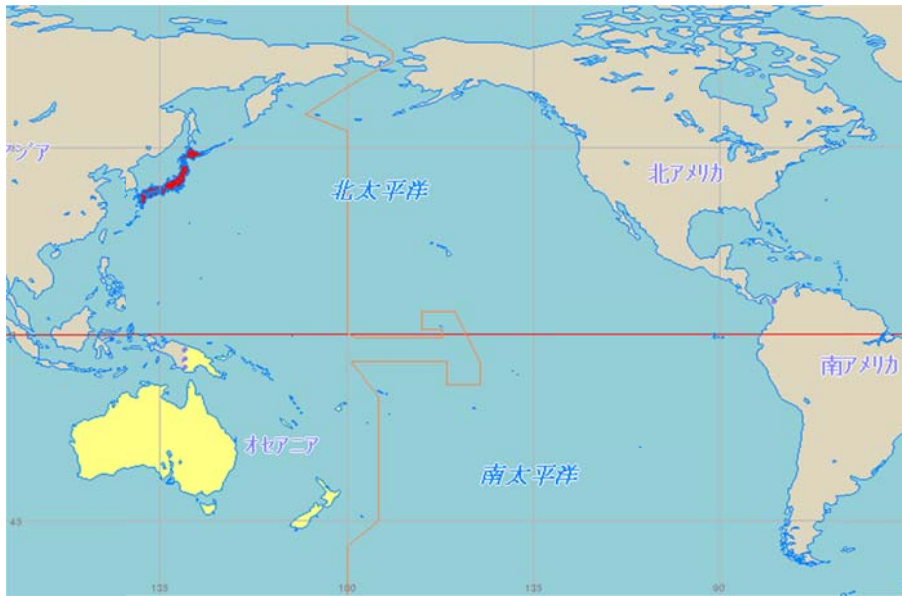


Name	Sir Name	Given Name	Department	Year
末續 美優	Suetsugu	Miyu	生命科学科	B4(リーダー)
宮川 まどか	Miyakawa	Madoka	生命科学科	B3(サブリーダー)
沢崎 鷹	Sawazaki	Taka	化学工学科	B3(エディター)
奥山 博史	Okuyama	Hirofumi	情報工学科	B4
伊東 紀碩	Ito	Kiseki	生命工学科	B3
日比 滉大	Hibi	Kohdai	生命科学科	B3
松井 将洋	Matsui	Masahiro	化学科	B3
松久 和歩	Matsuhisa	Kazuho	生命工学科	B3
目黒 創太	Meguro	Sota	生命科学科	B3
劉 曉夢	Liu	Xiaomeng	生命科学科	B3
青山 航大	Aoyama	Kodai	無機材料工学科	B2
山本 雅之	Yamamoto	Masayuki	物理学科	B2
劉 安越	Liu	Anyue	化学工学科	B2
王 丹	Wang	Dan	国際開発工学専攻	M1
佐川 夏紀	Sagawa	Natsuki	人間環境システム専攻	M1
中田 壮星	Nakata	Masatoshi	基礎物理学専攻	M1
濱村 肇	Hamamura	Hajime	環境理工学創造専攻	M1

2. オーストラリアとメルボルンについて（執筆担当：青山航大，劉安越）

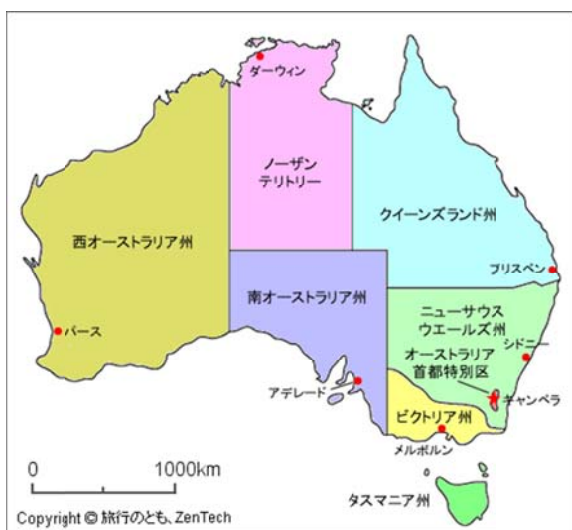
2.1 オーストラリア（青山）

2.1.1 オーストラリア



日本とオーストラリアの位置関係

正式国名は、オーストラリア連邦であり、6州、1準州と1特別地域からなる。下の国旗の大きな7稜星が6つの州とタスマニア島を表している。



オーストラリアの首都は、候補地であったシドニーとメルボルンの首都争いが激化したために打開策として人工的に作られた内陸都市キャンベラである。

2.1.2 面積

総面積は、世界第6位(769万 km²)で日本の約20倍。

2.1.3 人口、人口構成

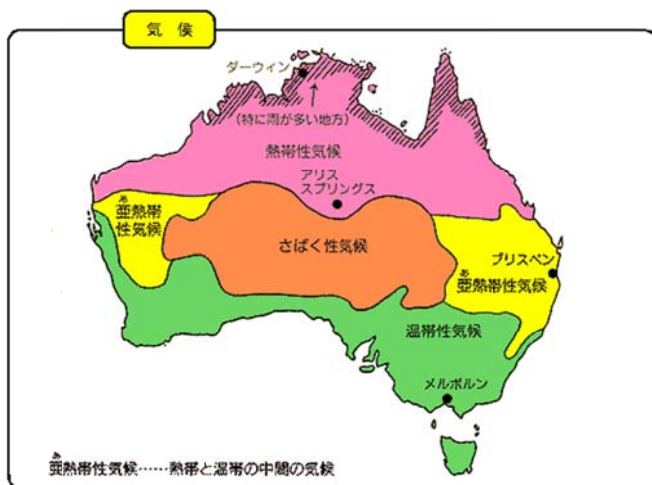
人口は約2294万人(2013年3月。豪州統計局)と日本の約5分の1と少なく、その構成比は、アングロサクソン系等欧州系が中心でその他に中東系、アジア系、先住民系である。

2.1.4 地形

オーストラリアの地形は、大きく三つに分けることができる。西部の大地はオーストラリアの3分の2を占めるが、ほとんどが砂漠で、人はあまり住んでいない。中央の低地は大鑽井盆地と呼ばれており、大部分が草原である。ここでは羊や牛の放牧が盛んである。実際に、field tripでウィンドファームへ行く途中のバスからの景色は、常に一面草原で、その中に牛や羊がいる光景だけであった。最後に東部の高地は東部の海岸沿いに位置し、太平洋から吹く湿った風のおかげで雨が降る。メルボルン市内でも何度か雨に遭遇したが、日本のように一日中雨が降ることはなかった。

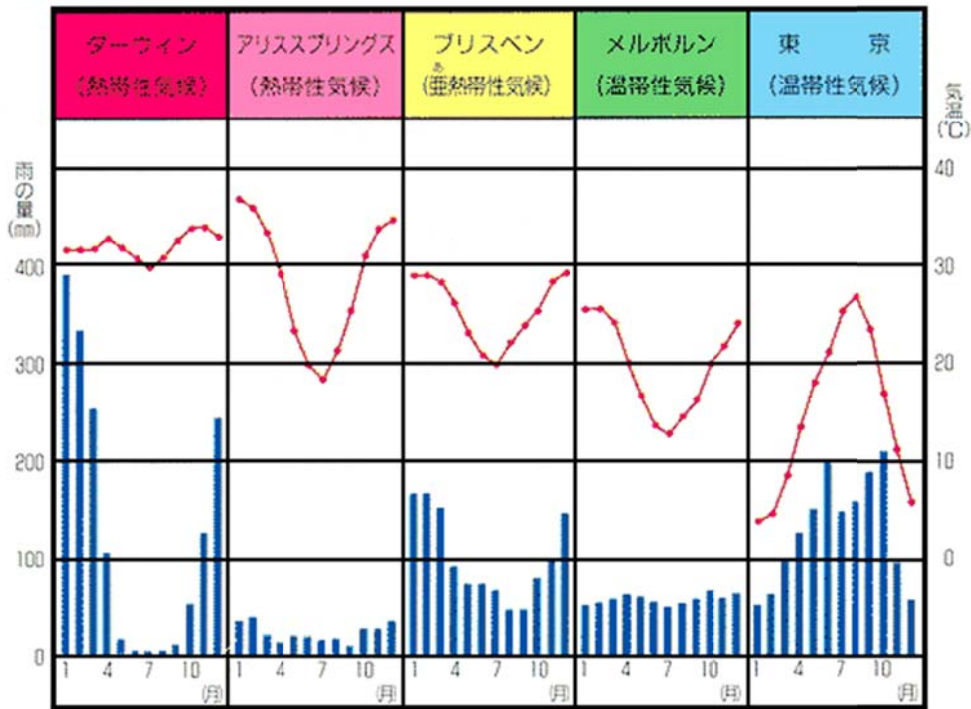


2.1.5. 気候



オーストラリアの北部は、ケッペンの気候区分に従うと熱帯となっており、最低気温が18度を下回ることがなく、とても暑い。気温が高いため、水蒸気を含んだ上昇気流が活発に発達し、北の海岸沿いでは、雨が多く降る。中央部は、乾燥帯に属し、気温が高く、ほとんど雨が降らない。南部は、日本と同じ温帯に属するため、1年を通じて、適量の雨が降り、過ごしやすい気候である。メルボルンも温帯にあるが、南半球にあるため季節が逆であった。(次頁データ)

各地の気温と雨の量



2.1.6 時差

オーストラリア大陸の時間帯は、東部、中央部、西部の三つに分かれていて、日本との時差は、それぞれ+1時間、+30分、-1時間となっている。



2.1.7 宗教

カトリック教 (26.4%)、英国国教 (20.5%)、他キリスト教 (20.5%)、仏教 (1.9%)、イスラム教 (1.5%)、他宗教 (1.2%)、不特定 (12.7%)、無宗教 (15.3%) となっている。

2.1.8 言語

英語

2.1.9 政体

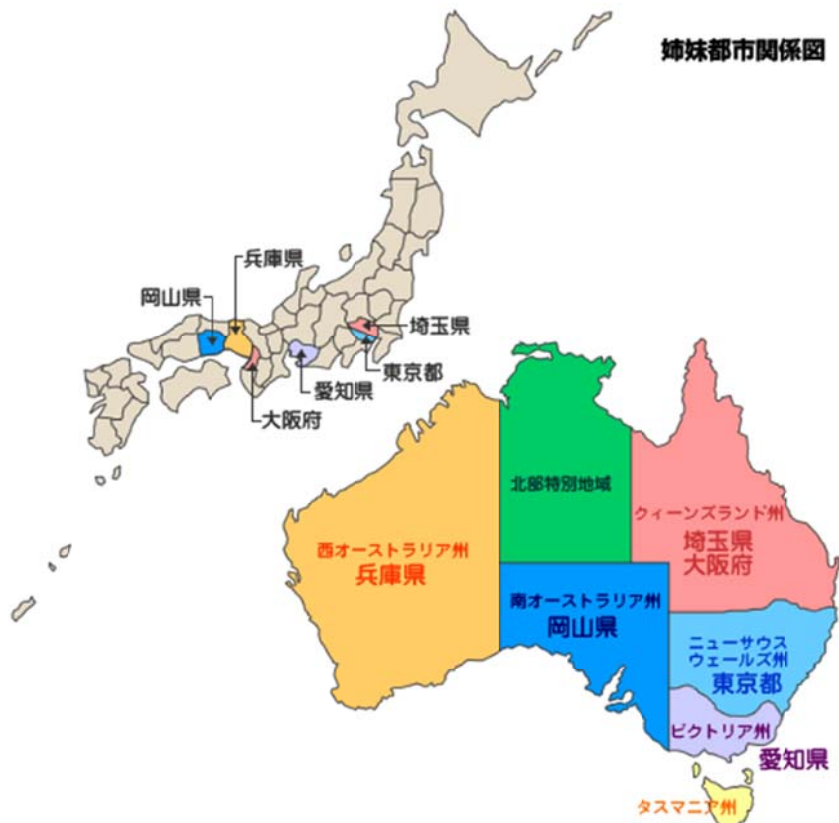
表向きには、立憲君主制議会制民主主義

2.1.10 経済

オーストラリアは、資源が豊かな国であるため、羊毛、鉱石からなる一次産業製品や、鉄、銅、亜鉛、石炭、石油、マンガン、ボーキサイトも開発されている。また、農業も盛んであるため、羊毛、果実、酪農品、砂糖、小麦、牛肉の輸出も盛んだ。オーギービーフは、日本でもブランドとして、多くの人に知られていると思う。その他に、教育産業や観光産業が発達していることは、日本からオーストラリアに留学する学生や旅行者の数を見ても明らかであると思う。

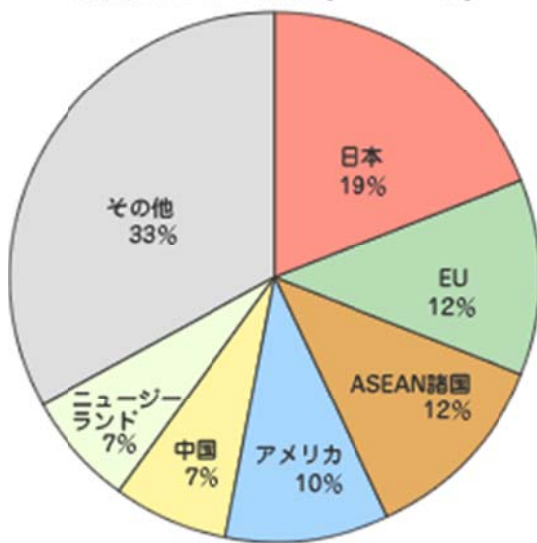
2.1.11 日本との関係

現在、各州と都道府県、また自治体や港町等の間では姉妹関係が 100 以上存在する。

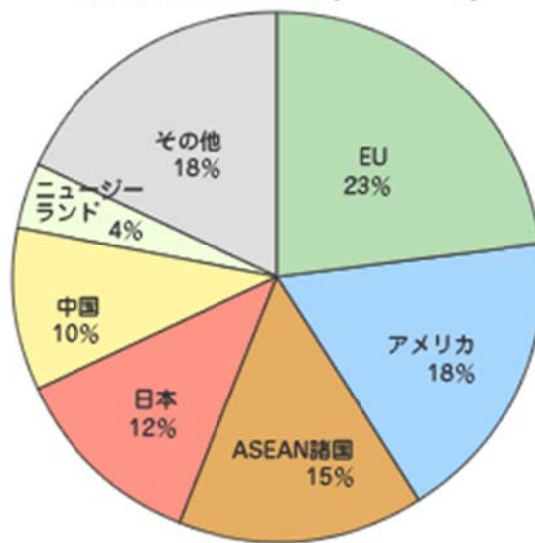


また、日本はオーストラリアにとって最大の貿易相手国であることは、次のページのグラフから見て取れる。

オーストラリアが輸出する商品の
輸出先とその割合(2002年)



オーストラリアが輸入する商品の
輸入先とその割合(2002年)



参考文献

<http://www.australia.arakawanet.com/html/sitemap/info.html>

<http://www.sarago.co.jp/nfhtm/au.html>

<http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Australia/Australia-State-Map.htm>

<http://www.australia.arakawanet.com/html/sitemap/info.html>

<http://www.ghrd.titech.ac.jp/w/wp-content/uploads/2015/04/48b0cd5125851742ae0129cc26f9dc7b.pdf>

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>

http://australia.or.jp/_old/discover/chapter03/001.html

<http://www.jsm.vic.edu.au/sekai/school-syokai/sankoshiryo/12syakai/7/02/index.htm>

2.2 メルボルン (劉)

我々は今回の留学プログラムで1ヶ月間メルボルンに滞在した。メルボルンはオーストラリアのビクトリア州にある市で、シドニーと並ぶ二大都市である。調査会社にもよるが、あるイギリスの経済誌が毎年発表しているランキングでは、何年にもわたってメルボルンが世界の住みやすい都市で1位を取り続けている。それほど住みやすく、生活しやすい都市であった。

2.2.1 メルボルン



- 面積 8806km²(東京のほぼ4倍)
- 人口 約408万人(2012データ)
- 地理 東経およそ145度、南緯およそ37.5度に位置する。オーストラリアの最南東のビクトリア州の州都である。ポートフィリップ湾に面し、都市内にはヤラ川が流れる。また、すぐ南にタスマニア島もある。
- 通貨 オーストラリアドル(1AU\$=約87円)
- 気候 四季がはっきりしており、一日の温度差が日本より大きい。我々が訪れた時期は、現地気候では冬から春にかけてのシーズンであったので、少し寒く、雨は1か月を通してほとんど降らなかった。
- 産業 自動車工業、機械工業、食品加工業が盛んである。シドニーと並んで、オーストラリアの大企業の多くが拠点をメルボルンに置いている。
- 交通 CBD内はトラム。CBD外は電車と車がメイン。バスもあるが週末の本数がものすごく少ない。道路は日本よりかなり広い。

2.2.2 Central Business District (CBD)



MELBOURNE CITY MAP

直訳で中心業務地区の CBD はメルボルンで最も活発な地区で、経済、産業、娯楽等が集積した人口の集中する地区である。モナシュカレッジはシティキャンパスがちょうど CBD の中心に位置していたため、授業後か授業前に散策することが多かった。CBD 内には無料でトラムが走っていて観光しやすかった、CBD 内の観光地はかなり多いため、おそらく個人差があるが、ここでは僕にとって印象深かった場所をいくつか紹介しようと思う。

ビクトリア州立図書館

ビクトリア州立図書館はメルボルンセントラル駅を出てすぐの場所にある。開放的なデザインで、中はとても広く、約 150 万冊の書籍を保管している。(東京都立図書館が約 170 万冊。) 図書館というよりも観光地としての側面が強く、とても美しく壮大な設計に感動した。



旧メルボルン監獄

昔の監獄の姿のまま使われなくなり、観光地となった場所である。メルボルンセントラル駅付近にある。警官姿のガイドに案内されて、囚人としてツアーに参加した。日本では経験できない楽しさがあった。



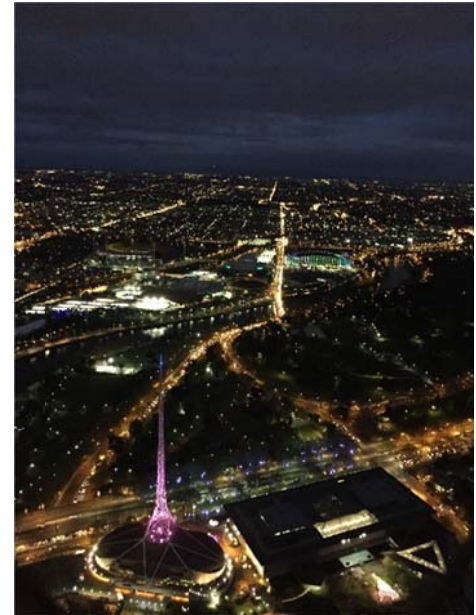
フリンダースストリート駅

フリンダースストリート駅はいかにも西洋風な駅で、サザンクロス、メルボルンセントラルと並ぶメルボルン最大級の駅である。どの時間でも人は多く、活気にあふれていた。駅周辺にも現代的な建物が並び、美しかった。おそらく我々が最も利用した駅である。

展望台からの景色

ユーレカスカイデッキはフリンダースストリート駅から歩いてすぐにある高層ビルである。ビルには南半球最高の高さの展望台がある。そこからメルボルンを一望でき、特に夜景はとても美しかった。

このプログラムの期間は1か月であり、その中でもおそらくCBDにいる時間が最も長い。なので、事前に調べるか現地の人から情報を聞くなどして、CBD内で回りたい場所をあらかじめ決めておくとよい。CBD内で観光できる場所はものすごく多いからだ。現にこのプログラム参加者がCBD内で観光した場所は全員バラバラである。



2.2.3 メルボルン郊外

CBDから少し離れると街並みはガラッと変わり、ほとんどビルが無くなり、住宅街へと変貌する。ほとんどの学生のホームステイ先はそのような場所にあることが多かった。また、クレイトンキャンパスもそのような場所にある。基本的に家にいることが多いのだが、少なからず観光地もあったので紹介する。



パフフィンビリー

フリンダースストリート駅からおよそ70分。ベルグレーブ駅にあるパフフィンビリーは機関車トーマスの由来にもなった蒸気機関車で、実際に乗ることができる。窓に座って足を出し、風にあたりながら乗る機関車はとても爽快だった。僕にとって、今回観光した場所の中では一番印象的だった。

2.2.4 その他の観光地

以下に紹介する場所は厳密にはメルボルン内では無いが、メルボルンに来たら必ず行っておきたい場所として有名である。我々のような留学生が行く場合はツアーに参加するのが最も良い。



グレートオーシャンロード



グランピアンズ国立公園

どちらも雄大な自然が広がり、日本では決して見ることのできない絶景であった。グレートオーシャンロードは海沿いの道を走り続け、あらゆる海の景色を満喫することができた。グランピアンズ国立公園では森や岩や滝といった自然の景色を満喫した。土日はこういった遠い場所へのツアーに参加する学生が多く、我々は英語のツアーと日本語のツアーに参加した。どちらも車で3時間ほどの場所であり、ツアー無しで行くことはほぼ不可能だと思われる。



野生のコアラ



野生のスマールペンギン



野生のカンガルー

また、野生の動物もそのような場所に生息しているので、ガイドさんが案内してくれた。左からグレートオーシャンロード、フィリップアイランド、グランピアンズ国立公園である。動物園も多々存在するが、やはり自然の動物のほうが魅力的に感じた。

参考文献

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%83%AB%E3%83%9C%E3%83%AB%E3%83%B3>

3. Monash University と Monash College について（執筆担当：日比滉大, 松久和歩）

3.1 Monash University（松久）

3.1.1 Monash University について



Monash University は 1958 年にビクトリア州議会議定書によって設立された大学である。

Monash という名はオーストラリアの有名な土木技師、第一次世界大戦時のオーストラリア軍司令官である Sir John Monash の名を取って名付けられている。左の写真は、キャンパスの一角に立っていた Sir John Monash の像。

Monash University は Times Higher Education の世界大学ランキングでは第 73 位にランクインしており、またオーストラリアの主要 8 大学の大学連合である Group of Eight に

所属している。Group of Eight とはオーストラリアの大学連盟でこの 8 つの大学は高い教育水準を保っている。

モナシュ大学には現在学部生が 39000 人、大学院生が 16000 人在籍しておりオーストラリアで最も大きい大学で、アート、デザイン、建築学部、教養学部、ビジネス・経済学部、工学部、情報技術学部、法学部、医学看護健康科学部、薬学部、理学部の合計で 9 つの学部が存在している。

3.1.2 キャンパスの概要

オーストラリアのメルボルンに 5 つ (Berwick, Caulfield, Clayton, Parkville, Peninsula) と海外に 5 つ (Malaysia, South Africa, China, India, Italy) のキャンパスが存在している。今回のプログラムでは Clayton Campus を使い授業を行った。

Clayton キャンパスは Monash University の中で最も大きいキャンパスであり、メルボルン中心部から南東に位置しており CBD から電車とバスを使い 1 時間程度で通うことが出来る。

以下の写真は Clayton キャンパスの施設についてである。左上の写真はキャンパス内のカフェテリアの写真である。キャンパス内には様々な種類のお店があり多くの学生が利用していた。ピザやハンバーガー、サンドイッチ等様々な種類のものが売られていた。次の写真は購買である。モナシュ大学のパーカーやマグカップ、USB など様々なものが売られていた。下の 2 つの写真は薬局や旅行代理店であるがこれら日常生活に必要なものもキャンパスの中にあった。



3.2 Monash College (日比)

3.2.1 Monash College について

Monash College は Monash University に入りたいと思う海外学生のための英語語学スクールのようなものである。

3.2.2 キャンパスの概要

Monash College は昨年で創立 20 年目を迎えた。Monash College は、留学生が今後の経歴において成功を収めるために、能力を引き上げたり、自信をつけることを目的としている。

Monash College のシティキャンパスはメルボルン市内中心部に位置し、ビルの 2、3、4 階であった。ビルのグランドフロアはレストランがいろいろあり、Monash College の生徒はもちろん、一般客も利用していた。最寄り駅は Flinders Street station か Melbourne Central station で、徒歩数分でキャンパスに着くことができる。メルボルンの電車は日本と違い、すべての電車が Flinders Street station から発着するため比較的アクセスは良かった。Monash College のビルは地図上では大きな道路に面するため比較的見つけやすいが、3 階のキャンパスの受付までは案内が書いておらず、少々分かりづらかった。



パス

3.2.3 キャンパスライフ

City キャンパスは英語学習のための施設となっているので、様々な国から語学留学を目的に来ている学生たちがたくさんいる。キャンパス内には自由に飲めるコーヒーやミルク、milo などが用意されており、とても居心地の良い学習空間が提供されている。また、フリースペースも充実しており、他国からの留学生の友達とリラックスしながら楽しく会話することも十分に可能である。英語学習用の教材も豊富に用意されており、リスニングの教材やレベル別に分けられた小説、英語に翻訳された日本の漫画(ONE PIECE, NARUTO, etc.) などが全て自由に読んだり、借りたりできるので、自分に合った学習教材を選ぶことができる。



4 英語研修プログラムについて（執筆担当：奥山博史, 沢崎鷹, 末續美優）

4.1 Monash English（奥山）

4.1.1 Monash English

Monash English(以下 ME)は Clayton キャンパスで行われていた理工系の内容に寄った授業に比べ、英語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングといった基礎能力を養うことを目的とした内容の授業であった。ME は週に 3 回あり、1 日 4 時間の授業となっていた。クラスのレベルは 1 から 7 まであり、事前学習で行われるクラス分けテストによって適切なレベルのクラスに分けられる。自分が授業を受けていたクラスの生徒の編成は、東工大 3 人、阪大 3 人、千葉大 3 人、徳島大 1 人、三重大 1 人、日本以外の国からの留学生 8 人となっていた。授業内容を詳細に述べると、英文を読んだり聞いたりする際に役立つテクニック、英語でプレゼンをする際によく使うフレーズなどを学びそれを実践するという形式の内容が多かったように感じる。スピーキングでは、クラスメイトと決められたトピックに関して自分の意見を英語で交わし合うという内容のものが多かった。自分の意見を英語にして発信するのというのは意外にも難しく、これはとても良い練習になった。授業では Folio という課題のようなものがあり、その良し悪しで成績が決定する。Folio の内容はリスニング、リーディング、ライティングが主になっており、中にはプレゼンを行うものも 1 つあった。英語でプレゼンを行うというのは自分にとって初めての経験だったのでとても貴重な経験となった。プレゼンの出来はお世辞にも良いと言えるものではなかったが、やりきったという事実が自分にとって大きな自信へと繋がった。

担任の先生は生徒のことをしっかりと考えてくれており、昼食の時間などに、なにか悩みがあればなんでも相談することができる。もし、なにかちょっとした悩みでも持つことがあれば、気兼ねすることなく何でも相談するべきであると思う。キャンパスの先生は本当に学生のことを考えてくれており真摯に相談に乗ってくれるので、必要なときには大きな助けになるであろう。

また、授業だけでなく、クラスメイトである日本以外の国からの留学生と休み時間や授業外、食事の時間に行った他国の文化や他愛もない内容の会話全てが大変有意義なものであり、英語で会話する、自分の意思が伝えられるということがとても嬉しかった。

4.1.2 ワークショップ

City キャンパスではワークショップという補習のような自由参加の授業が平日に毎日行われている。ワークショップにはリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングそれぞれに特化した内容のものが用意されており、自分の苦手な能力を補強することが可能である。各ワークショップは1回1時間と短い、実際の会話で使える汎用性のあるフレーズや会話するときに気をつけるべき事を学び、更にそれを実際に使って会話する時間をたくさん設けられているのでとても充実した内容になっており、もしワークショップを受講できる機会があれば是非参加することをオススメする。



4.2 English for Engineering and Science (沢崎)

4.2.1 Class

こちらでは、先ほど述べられた授業と比較できるように Class と呼んでおり、主に理工系の授業を行った。そのため阪大と東工大の理系学生で構成されており、日本に帰ってきたあとも生かせるよう三人組を作り英語で議論をし、毎回授業の終わりにプレゼンを行った。授業の初めには理系の用語を英語でどう表現するか、プレゼンでどのように構成したり表現したりするのか、など非常に実践的な内容が取り上げられた。Monash English のように英語を話す機会が多く設けられているわけではないが確実に将来使えるようなことを学ぶことができ、僕は大変学ぶものが多く参加できてよかったとおもっている。授業の評価は自分の専門をプレゼンで行うというものであり、最終日にプレゼンを行った。プレゼンを、あまり経験がない上に英語で行い、さらに自分の専門に関する事というわけで、常に難

しかつが、よい経験になったと思う。また大学で習った内容を復習するとともに英語での表現も身に付けることができるため有意義なものとなった。他のクラスメイトの専門の内容も聞くことができるためとても楽しかった。

4.2.2 Certificate Presentation

卒業式のようなものが行われた。そこでは三人一組となり、思い出を軽くプレゼン形式でみんなに紹介する、という時間があった。みんなの話を聞いているうちに自分の思い出も振り返り、非常にさみしくなった時間であった。最後に先生から直接修了証を渡されたときはまだ帰りたくないという気持ちになった。



修了証を受け取っている様子



プレゼンしている様子

4.3 日常生活での英語学習について（末續）

モナシュカレッジとモナシュユニバーシティの英語研修以外にも英語を学ぶ機会はたくさんありました。積極的にホストや先生に話しかけたり、日本語ではなく英語のツアーに参加したり、テレビを見たりラジオを聞いたり、日記を書いたりなどです。

4.3.1 ホームステイ

一番はホストとの会話です。日常で英語を一番使ったのはホストとの会話でした。私のホストは、30代の若い女の人一人だったので会話をする時間がたくさんありました。また、ホストが気を遣ってくれてシンプルな英語で会話をしてくれ、自分のペースで会話することができたのでリスニングにはあまり苦労しませんでした。毎日の出来事を共有したり、メルボルンのオススメの観光スポットを聞いたり、会話のトピックはたくさんありました。



4.3.2 学校生活

私のクラスには8人ほどの留学生がいたのですが、彼らは同じレベルということもあり気兼ねなく会話することができました。自分たちの国や文化について、メルボルンの生活について、家族について等、授業外でも仲良くなり積極的に話すようになりました。クラス外で留学生や現地の学生と出会う場は少なかったのですが、モナシュ大学では、漫画が好きな学生や日本語を学んでいる学生による日本語クラブがあり、空いている時間に彼らの部室に遊びに行き現地の友達をつくりました。英語と日本語を交互に使って会話をしたり、放課後一緒にでかけたり、また、彼らが週末に開催しているイベントなどに積極的に参加することで英語を使つての交流の機会が増えました。



4.3.3 その他

他には、自然と耳に入ってくる英語です。私の家では常にテレビがついていたので常に英語が聞こえる状態でした。もちろんテレビの英語はスピードも速く、俗語を使っていたりするため聞き取るのは大変でしたが、映像をみながら場面や台詞を想像することができたので徐々に聞き取れるようになりました。また、ツアーではあえて英語のツアーに参加したりもしました。他の参加者と仲良くなったり、ガイドさんに話しかけたり、ガイドさんの説明を録音して通学の時に聞いたりしていました。

そして、私は毎日英語で日記を書くようにもしていました。その日の出来事を忘れないようにするためでもあり、その日習った文法を使うためでもあり、一番はライティングの練習になりました。誰かに読んでもらうわけではないので、正しい文法を使えているのかは分かりませんが、スピーキングよりも文法を意識することができ、単語を調べながら書いたりしたのでボキャブラリーも増えました。また、授業中に手紙の書き方を習ったので、日本宛にエアメールを書いたりもしていました。

外国人と出会う機会も少なく、授業以外では日本語だけでも生活できてしまう環境だったため、自分から意図して英語に触れる機会を作ることがとっても大切でした。一ヶ月間でどれだけ英語力がのびたのかはわかりませんが、確実に成長できたと実感しています。



5 Field Trip について（執筆担当：伊東紀碩，劉曉夢，王丹）

5.1 Wind Farm とは？（伊東）



私たちは、日本企業が海外でどのように活躍しているかを実際に見るために、Bald Hills Wind Farm に行った。2 週目の木曜日にクレイトンキャンパスから 3 時間ほどバスに乗ってたどり着いた。この風力発電所は日本の企業である三井物産が投資することによって完成した。メルボルンの中心街から約 200km 離れたところにある巨大な発電所で、東京ドーム 300 個分の敷地に 52 基の風車がある。タービンのはねは一個 8 トン、一番下から一番上まで 125m もある巨大なタービンであった。タービン一つ作るのに 3 億円かかるらしく、それが 52 基もあることからこのプロジェクトの大きさがうかがえた。この風力発電所では一年間で 380,000MWh 発電しており、これは 62,000 世帯の一年間の消費電力に値する。元々牧場であった土地に発電所を作ったため、今でも牛や羊などの放牧がおこなわれている。

5.2 Wind Farm について現地で伺ったお話（劉）



(写真 1 : 南場さんからお話を伺っている様子)



(写真 2 : Wind Farm につながる電線)

Wind Farm では、現地で勤務なさっている三井物産の南場さんという方からお話を伺う機会を頂いた(写真 1)。私が伺ったお話の中で、1 番注目したのは写真 2 のような電線の配置である。この電線を通して Wind Farm で作られた電力が各地域に運送されている。写真

2では真っすぐに電線が配置されているが、中には真っすぐに電線を配置できない地域もあると南場さんから伺った。普通、真っすぐに電線を配置した方がコスト的にも安く抑えられるのだが、そうはできない理由があると仰っていた。それは電線を配置することに関する、各地域の住民の意見と関係してくる。住民がその地域で電線を配置することに賛成できなければ、そこを迂回して配置しなければならない。このような背景があり、実際の電線はくねくねと曲がっているのである。この問題が風力発電がその地域にもたらず最大の問題だと南場さんは仰っていた。また、現地には技術者がたくさん働いていて、その中の Glenn さんという方から興味深いお話を伺うことができた。Wind Farm のタービンの羽は風向きによって自在に変えられることができ、風を効率的にキャッチすることができていた。また、1個8トンもある羽を本当に風の力だけで回しているのかという質問の答えとしては、風を効率的にキャッチする仕組みを実現したおかげで他の力に頼らず、風の力だけで回しているという回答を頂いた。

5.3 Wind Farm についての感想 (王)

Wind Farm の見学を通して、日本の技術が世界をリードしているという実感があった。そんな大きいプロジェクトなのに、マネージャー一人でメルボルンに行って、現地の人と一緒に働き、一緒にプロジェクトを完成したことに感動した。見学を通して、風力発電の原理を知り、実際にどういう風に運営しているかや、プロジェクトを完成させるためにどのような努力をしたかがわかった。やはり、世界を変えるのは技術だと感じた。技術者としてのプライドを持って、世界に貢献できるように頑張りたい気持ちが強くなった。

6 Monash University 訪問について (執筆担当：佐川夏紀，目黒創太，山本雅之)

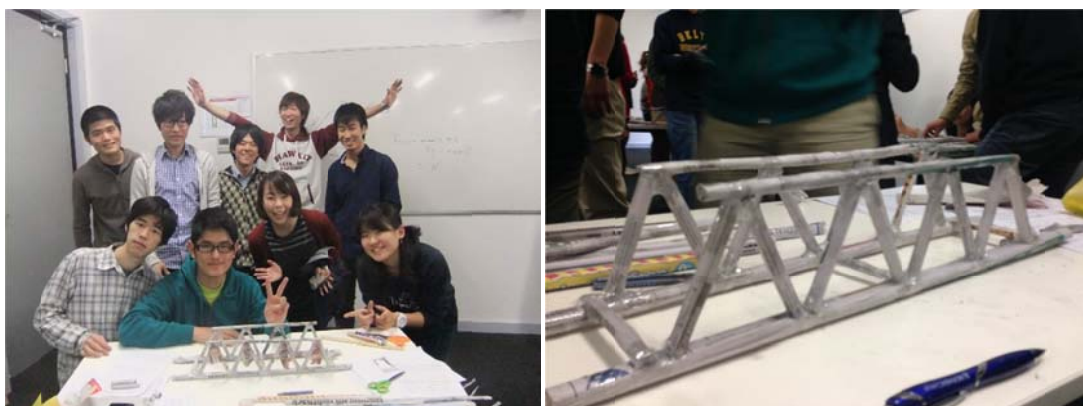
6.1 Engineering Lecture について (佐川)

Monash University の土木工学の教授の授業を1コマ分受講した。講義内容は座学ではなく、いかに軽くて強い橋を新聞紙で作るかというコンペティション形式のものであった。

教授による簡単なコンペティションの概要の説明を受けた後、大阪大学の学生も混合で、9人で1つのグループを作り、各グループで協力して橋の作成を開始した。今回作成した橋は、スパンが約65cmで幅が10cm程度のトラス橋である。橋の強度の測定方法としては、作成した橋の両端を固定し、その上に重りを載せた台車を走らせて強度を競うというものであった。

橋の作成に与えられた時間は約1時間であった。グループ内で橋の形と、どのようにトラスを入れていくかを相談して決定し、新聞紙を丸めて橋を作成していった、どのような形にすれば強い橋が作れるのか、どのように新聞紙を用いればより強い材になるのか、各グループで試行錯誤しながら形を作っていた。

1時間後には、それぞれの班で個性のある橋が完成し、コンペティションはかなり盛り上がった。橋の上を台車が通ると各グループから歓声が上がり、それぞれの専攻を越えて、知識を出し合い、それぞれがそれぞれの得意な分野で力を発揮しながら協力して学ぶ楽しさを実感した。



6.2 Tour of Monash Engineering Facilities (山本)

Engineering Activityの一環として、Monash Universityの職員の方に案内してもらい、工学部の施設見学を行った。はじめに軽い説明を受けたあと、工学部の各学科の建物、工学系の施設、図書館などを見て回った。見学終了後は、記念にノート、ボールペン、エコバッグなどを頂いた。

Monash Universityの建物には変わった形のものも多く、中には機能性まで考慮して設計されている建物もあった。日本では、大学の建物は無機質であることが多いので、このように見た目などにも工夫を凝らしているのは面白い。

建物の例 その1





建物の例 その2

水不足を少しでも解消するために、斜めになっている部分を利用して、雨水を貯められるようになっている

モナシュ大学のクレイトンキャンパスはかなり広く、工学部の建物だけでも相当の数があった。建物内には各学科の紹介や展示などもあり見て回るだけでも楽しめた。また、実際に使われている教室も見ることができ、良かった。以下は展示や教室の様子である。



工学部の教室の様子

工学部の建物内での展示の例



キャンパス内にあった巨大なオブジェ

キャンパス内には、その他にもニュートンのリンゴの木や、実際に崩落した橋の展示などもあった。このような展示も日本ではあまり見られないため、とても貴重な経験となった。

ニュートンのリンゴの木は話には聞いたことがあったが実物を見たことはなかったので、見た時には少し感動した。橋の展示も単に見て楽しむだけでなく、工学的な見地から見ても興味深いものであったと思う。



ニュートンのリンゴの木

ニュートンが万有引力を発見したとされるオリジナルの木から接ぎ木されたうちの一つ



実際に崩壊した橋の展示

以上、工学部の施設見学を終えて、日本の大学と随分違うところが多いと感じた。全体として、楽しみながら学べる環境が整っているのではないかと思う。この見学は、将来、大学院に進学する際にも海外の院を考える一つのきっかけになるのではないだろうか。

6.3 Monash Motorsports について (目黒)

ここではモナシュ大学でとくに有名な Monash Motorsports について説明する。Monash Motorsports とは端的に言えば「レーシングカー制作部」のようなものである。具体的に説明すると Monash Motorsports とは Formula SAE とよばれるアメリカ自動車技術協会の主催で行われる自動車競技会に出場するチームである。この競技会ではデザインとその製作費、安全性など様々な点が評価されて順位が決定される。この競技会は 1978 年くらいから非常に小規模で始まったものだったが、今では世界の様々な場所で開催されるまでの大きなイベントとなっている。もちろん日本でも開催されている。この競技会の最大の特徴がレースカー製造からレースに出場するまでを学生主体で行うということである。これは学生たちにエンジニアリングなどの実践的技術を身につけさせるという目的があるためである。またこの Monash Motorsports はかなりの強豪であり、様々な国際競技会でも功績を残している。

私は特にこの分野について詳しいわけではないため他にこの競技会に参加する団体などの違いを完全に把握しているわけではない。そのため今から述べることは競技会に参加する団体としてはあまり目立った特徴ではない可能性もある。しかしこの Monash Motorsports では私が聞いた限りにおいては様々な驚くべき特徴であったためそのうちの一部を紹介したい。



写真1 Monash Motorsports の方々

(引用元 <http://www.monashmotorsport.com/the-team/>)

その特徴とは非常に多くの企業がこの Monash Motorsports に出資、または技術提供をしているということである。この企業の多さについてはレースカーにラッピングされている企業の数からもわかる。(写真2) また、技術提供の一例として車体のリアウィングスポイラーがある。(写真3)このパーツはレースカーの後部に装着して本体への空気抵抗を減ら

すというものである。これを学生がデザインする。そして企業の所有する3Dプリンタを使用することで理想的な形のリアウィングスポイラーを作ることができるようになる。そのほかにも素材としてカーボン素材を提供してもらするなど様々な技術提供を企業から受けている。このように企業が非常に協力的であるのにはもちろん理由がある。それはこの競技会を通じて育成された優れたエンジニアなどにその会社に就職してもらするなど人材育成の面で大きなメリットがあるためである。

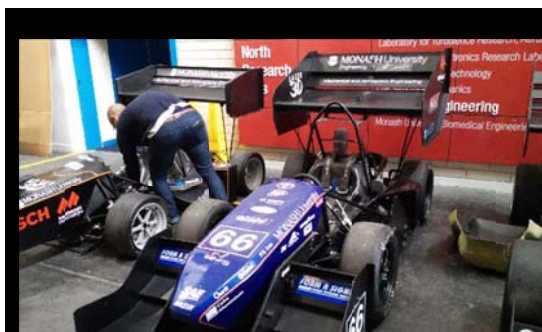


写真2



写真3 リアウィングスポイラー

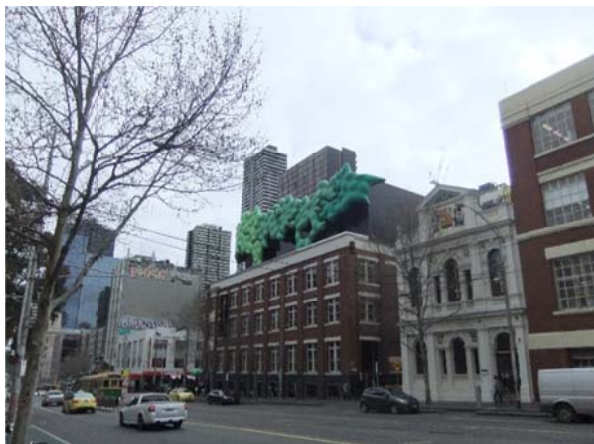
また、写真1からもわかるようにこの Monash Motorsports には多くの人が居る。これらの人は単に車体を組み立てたチームであるというわけではない。Monash Motorsports では分野として大きく分けるとテクニカルチームとビジネスチームが存在している。このテクニカルチームがレースカーの組み立ておよびシミュレーションを行っている。ここでは単に組み立てをすぐに行うわけではなく時間の半分ほどをこのシミュレーションに使い、そのうえで時間の半分ほどを組み立てに使うということであった。その一方でビジネスチームはスポンサーとの交渉や予算の計上などを行う。これは先ほど述べたような技術、資金提供をする企業と関わるため、競技会における予算などの審査対象となる部門ということでもあるのでテクニカルチーム同様に重要な役割を担っていることがわかる。

7 その他（執筆担当：松井将洋, 宮川まどか, 中田荘星）

7.1 メルボルンの町など（松井）

7.1.1 メルボルンの景観

オーストラリアの道路や建物は、日本のそれらに比べると落書きが多く、いくつかの建物はカラフルで妙な形である。治安はいいという話も聞き、実際自分は良いと感じたのだがこのプログラムに参加していた東工大の人で、電車内で盗難に遭ってしまった人もいたので完全に気を緩めていい感じではないようである。



カラフルな建物、落書きの一例。左の写真の中央のいびつな建物やその左側の建物の一体どうやってかいたのか目を疑う落書き、右の写真の右側のカラフルなオフィスがそれである。

また、メルボルンの町には大きさを問わず教会やガーデンがとても多い。メルボルンシティでも、教会は St Patrick's Cathedral、St James、St Mary Star of the Sea、Church of Christ、St Francis'、St Paul's Cathedral、Baptist、Scot's Presbyterian、St Michael's、St Augustine's とこんなにあ



St. Patrick's Cathedral

り、ガーデンは Carlton Gardens、Flagstaff Gardens、Fitzroy Gardens、Treasury Gardens、Royal Botanic Gardens とこれも多い。

大きな教会で中も神聖な雰囲気である。





Fitzroy Gardens。自然が広がっているだけに思えるかもしれないが（実際他のガーデンは自然のみ）実はこのガーデンだけキャプテン・クックのコテージなどがある（右側画像）

7.1.2 オーストラリアのお金

お金の種類と大きさなどは次の通りである。現金の種類はおよそ日本と同じくらいである。

種類	日本で言うなら	大きさ、形状、色	何が書かれているか
\$100 札	1 万円札	15.9cm×6.5cm 長方形 緑色、ポリマー紙幣	表はネリー・メルパ、裏はジョン・モナシュ
\$50 札	5 千円札	15.1cm×6.5cm 長方形 黄色、ポリマー紙幣	表はデイビッド・ユナイポン、裏はエディス・カーワン
\$20 札	2 千円札	14.4cm×6.5cm 長方形 赤色、ポリマー紙幣	表はマリー・ライビー、裏はジョン・フリン
\$10 札	千円札	13.6cm×6.5cm 長方形 青色、ポリマー紙幣	表はバンジョー・パターソン、裏はダム・マリー・ギルモア
\$5 札	500 円玉	13.1cm×6.5cm 長方形 紫色、ポリマー紙幣	表はエリザベス 2 世、裏はキャンベラの豪州国会議事堂 or 表はヘンリー・パークス、裏はキャサリン・ヘレン・スペンス
\$2 硬貨	なし	直径 2.0cm 円形、金色	裏面はアボリジニと南十字星
\$1 硬貨	100 円玉	直径 2.4cm 円形、金色	裏面は 5 頭のカンガルー
¢ 50 硬貨	50 円玉	1 辺 0.8cm の正十二角形 対辺の距離は 3.2cm 銀色	裏面はオーストラリアの国章、第 2 次世界大戦、2006 年コモンウェルスゲームズ など
¢ 20 硬貨	なし	直径 2.8cm 円形、銀色	裏面はカモノハシ
¢ 10 硬貨	10 円玉	直径 2.3cm 円形、銀色	裏面はコトドリ
¢ 5 硬貨	5 円玉	直径 1.9cm 円形、銀色	裏面はハリモグラの絵



長さは自分で定規で測ったので若干のズレはあるかもしれないがオーストラリアでは現金はこれらのものを用いる。紙幣は高いほど大きくなるという規則があったが硬貨には規則性はなかった。ちなみに昔は¢1硬貨¢2硬貨もあったみたいだが貨幣価値が低いためになくなった。

参考までに表からは想像しにくい¢50硬貨(下)と少し足りないがいろんな現金(上)



オーストラリアでは豪ドルで買い物を行う。だいたい1豪ドル=80~90円くらいで\$1(ドル)=¢100(セント)ある。多くのお店ではクレジットカードが使える。

日本とは違い一つ一つのものの物価が高いのでお金の減りが早かった印象である。

それに加え、自動販売機以外で小銭を使う場面が日本ほど多くはないので小銭が財布にたくさんあった印象である。日本のダイソーもメルボルンシティにはあるのだが\$1均一ではなく、\$2.8均一なので小銭が使いそうで使えず、自販機も大体\$1.5以上するものが多いので、もし来年以降このプログラムでオーストラリアに行く人々でこの報告書を読んだのであれば是非参考に小銭は計画的に消費していただきたいものである。

参考文献

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%BB%E3%83%89%E3%83%AB>

7.2 ホームステイでの生活について (宮川)

7.2.1 生活

今回の留学で初めてホームステイでの生活を経験したが、すべてが新しくあつという間の1か月であった。受け入れ先の家族は、母、父、祖母、10歳の女の子、8歳の双子の男の子、犬という構成で、初めての海外生活で緊張している私を暖かく迎え入れてくれた。とても大きな家で、家の中にはシャワールームが3つ、庭にはプールやバスケットゴールがあり、双子の兄弟は常に駆け回って遊んでいて、にぎやかで笑いが絶えない家庭で、もうひとつの家族ができたようであった。さらに、スクールホリデーが始まると、親戚が集まってきており、ある日家に帰ると9人の子供が家にいて、私が帰ってくるのを知ると、「Hallo, Madoka! How are you?」と言ってハグをしてくれた。また、親戚の大人たちも、日本についてたくさん聞いてくれ、とても素敵な時間を過ごすことができた。毎日、家族みんなで食事をするのだが、その時に一人ずつ、その日に起きた一番嬉しかった出来事と一番悲しかったできごとを話すという恒例行事が行われていた。一人ひとりの嬉しかったことはみんな喜び、悲しかったことはみんな悲しむのである。とても素敵な習慣で、私も家族ができたときには行おうと思った。毎日学校があり、ハードな授業があった日はクタクタになって帰ってきて、更に英語の不自由さでへこんでいる時もホストファミリーのもとに帰ると元気になれた。英語だけでなく、家族の在り方も学べたのではないかと思う。

7.2.2 食事



朝食は学校の授業があり、家を出る時間が早かったので、毎朝自分で用意していた。キッチンには常にパンが3、4種類用意してあり、好きなパンをトーストして食べていた。他にはシリアルも3、4種類あり、ヨーグルトをかけて食べていた。夕食はホストマザーが毎日作ってくれ、とても手の込んだ料理で美味しかった。日本では食べたことのない料理も出てきて、それについての話もしながら食事をした。左の写真はおいしかった夕食の一つ例である。また、メルボルンの人たちは、コーヒーがとても好きで、毎日3~4杯くらい飲んでいて、ホストマザー自慢のカプチーノがとてもお気に入りであった。

7.2.3 その他

特に不自由なことはなかったが、ひとつだけ、日本との違いで大変だと感じたことは、水が少ないという理由で、シャワーの時間を制限されていたことである。日本では毎日 15 分ほどかけてシャワーを浴びていたのに対し、メルボルンでは 4 分で入らなければならなかった。しかし、雨があまり降らないという特徴を持つメルボルンでは、大切な習慣であるので、その心は大切にしたい。節水に努力し、シャワーを短時間で浴びられるようになった。

また、オーストラリア人が毎年盛り上がる、オーストラリアンフットボールもちょうど盛り上がるの時期で、家族みんなで最頂のチームを応援し、楽しんだ。このように、オーストラリアの文化を肌で感じることができるのも、ホームステイの良いところだと思う。



フットボールのユニフォームを着た子供たち

7.3 メルボルンのコーヒー文化について（中田）

オーストラリアは様々な文化を持っている。なかでも、メルボルンはコーヒーが美味しい街として有名である。街中にはたくさんの素敵なカフェがあり、コーヒー好きはもちろん、そうでない人も楽しめる環境だといえる。この章では、メルボルンのコーヒー文化をまとめるとともに、コーヒーの基礎知識やおすすめのカフェも紹介していこうと思う。

7.3.1 メルボルンのコーヒー文化

オーストラリアはもともとイギリス文化圏だったので、伝統的には紅茶がメインだった。しかし、80年代後半にやってきたイタリア系の移民によってエスプレッソ系の飲み物（ラテやカプチーノなど、詳しくは次項で説明）が持ち込まれ、これがメルボルンの人々に受け入れられたのが始まりと言われている。メルボルンのカフェ文化は欧州のそれと比べ、比較的若いものといえる。

イタリアから持ち込まれた文化が主なので、メルボルンでコーヒーというとエスプレッソが主流である。カフェでブラックコーヒーを頼むと、日本で飲むブラックコーヒーではなく、エスプレッソ、もしくはエスプレッソにお湯をそそいだ **long black** という飲み物が出てきた。日本でいつも私たちが飲んでいるブラックコーヒーは、**filter coffee** や **batch brew coffee**、**pour over coffee** というので、注文する際には注意が必要だ。フィルターコーヒーは近年から飲まれ始めたもので、実際、数年前まではアイスコーヒーなどはなかった。

また、同じフィルターコーヒーでも、日本とメルボルンだと少し味に違いがある。メルボルンのコーヒーは、日本で飲むコーヒーよりも苦味が抑えられており、酸味や甘みが際立つ、さわやかな味が特徴である。これはエスプレッソが主流の文化であることに由来しており、フィルターコーヒーはエスプレッソのように苦味の強いものより、すっきりしたものが好まれるからだそうだ。

7.3.2 コーヒーの種類

コーヒーと一口に言っても、フィルターコーヒー、エスプレッソ、カフェラテ、カプチーノなど、たくさんの種類がある。そこで、ここでは基礎知識として主なコーヒーの種類をまとめたいと思う。

まず、フィルターコーヒーとエスプレッソの違いについてである。深煎りのコーヒー豆を細かく挽き、専用の器具を用いて圧力をかけ短時間で抽出した、濃い少量のコーヒーのことをエスプレッソと呼ぶ。一方、ペーパーフィルターなどを使って入れるのが、私たちがイメージするコーヒーであるフィルターコーヒーだ。

さらに、エスプレッソはミルクを入れることによってカフェラテなどにもなる。エスプレッソ系の飲み物の説明と概念図を下に記載しておく。

【espresso , short black (エスプレッソ、ショートブラック)】

上述のとおり抽出したコーヒーでとても濃い。そのためカフェインが多いように思えるが、抽出に時間がかかっていない分、普通のフィルターコーヒーよりもカフェインの量は少ない。

【long black (ロングブラック)】

お湯にエスプレッソを注いだもの。ブラックコーヒーが好きな方はこれを頼むことになるかと思う。

【café latte (カフェラテ)】

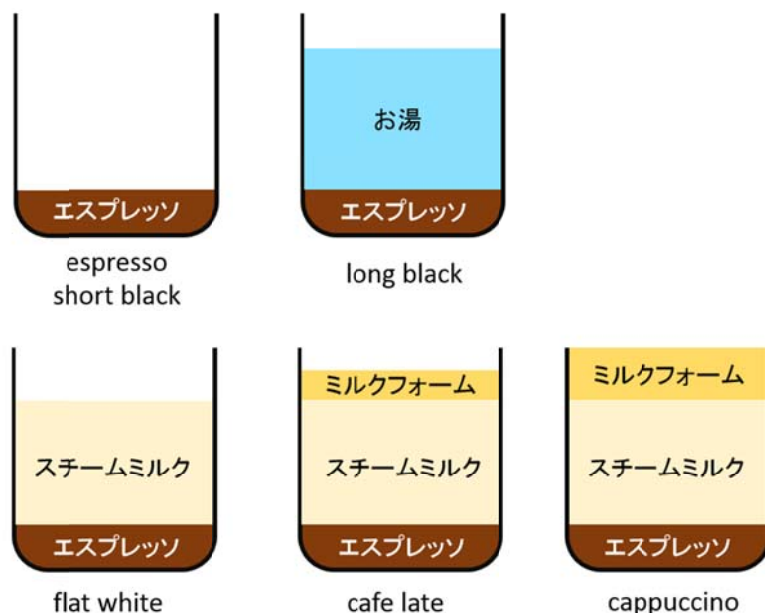
エスプレッソに、蒸気で熱したミルク (スチームミルク) を加えて作っている。ミルクを温める際にできる細かな泡 (ミルクフォーム) によって滑らかな口当たりになっているのが特徴。

【cappuccino (カプチーノ)】

エスプレッソに、よりミルクフォームが多いスチームミルクを加えて作る。最後にココアパウダーなどをまぶすこともある。

【flat white (フラットホワイト)】

エスプレッソに、ミルクフォームが少ないスチームミルクを加えて作る。カフェラテやカプチーノと比べて、一口目からよりしっかりとしたエスプレッソの香りを楽しむことができる。



エスプレッソ系の概念図(<http://lokeshdhakar.com/coffee-drinks-illustrated/>)

フラットホワイトはオーストラリアやニュージーランドではポピュラーなコーヒーで、日本でも徐々に提供され始めている種類である。もしどれを頼んだら良いかわからないという人がいたら、本場を味わうという意味でも、まずはフラットホワイトを飲んでみるべきだと思った。

7.3.3 おすすめのカフェ

メルボルンには、素晴らしいコーヒーを提供するカフェがたくさんある。もし新しくできたカフェが普通の味のコーヒーを提供する程度のものであった場合は、そのカフェは長く続かないとも言われており、街中で何気なく立ち寄ったカフェでもおいしいコーヒーを楽しむことができる。そのため、選択肢がありすぎてどのカフェに入ったらよいかわからないという状況が起きてしまいがちだ。そこで次のページから、メルボルンの人々にも人気の、特徴的なカフェを3つピックアップし、紹介したいと思う。

(1) 【Switch Board Café】

このカフェラテは他のカフェと比べてミルクがとても濃厚である。場所もデパートの地下アーケード内にあり、コーヒーを作る場所も壁の中に埋め込まれているような面白い構造になっている。通路を挟んで反対側には小さなカップルシートやカウンター席が少量だけ用意されており、まさに隠れ家のような雰囲気だった。文庫本を持って行ってゆっくりと自分の時間をすごしても良いし、友達と行ってコーヒーの味を楽しむのも良いと思う。

(住所：220 Collins St、Melbourne VIC 3000)



コーヒーを作るカウンター。注文をとってくれたお姉さんがとても親切な方だった。

コーヒーを飲む場所。まさに隠れ家のような雰囲気だった。



(<http://www.gogomelbourne.com.au/gourmet/cafe/252.html> より引用)

(2) 【7seeds Specialty Coffee】

フィルターコーヒーを提供しているカフェ。エスプレッソ系のコーヒーもおいしかった。ブレンドコーヒーもありますが、本日のおすすめコーヒーなどには、ひとつの農園で取れたコーヒー豆のみを使用するシングルオリジンという手法をとっている。また、どの農園から豆を買うかもこだわりを持っており、どこかの農園でとれたどの種類の豆を使っているかを記載した紙がコーヒーと一緒に出された。食事もおいしく、居心地が良いため、ついつい長居してしまうようなお店だった。(住所: 106-114 Berkeley St, Carlton VIC 3053)



コーヒーと豆の説明書き。説明書きではコーヒーのフレーバーや農園の説明もされている。
(<http://www.truelocal.com.au/business/7-seeds-specialty-coffee/carlton> より引用)



料理の一例

(3) 【Cup of Truth】

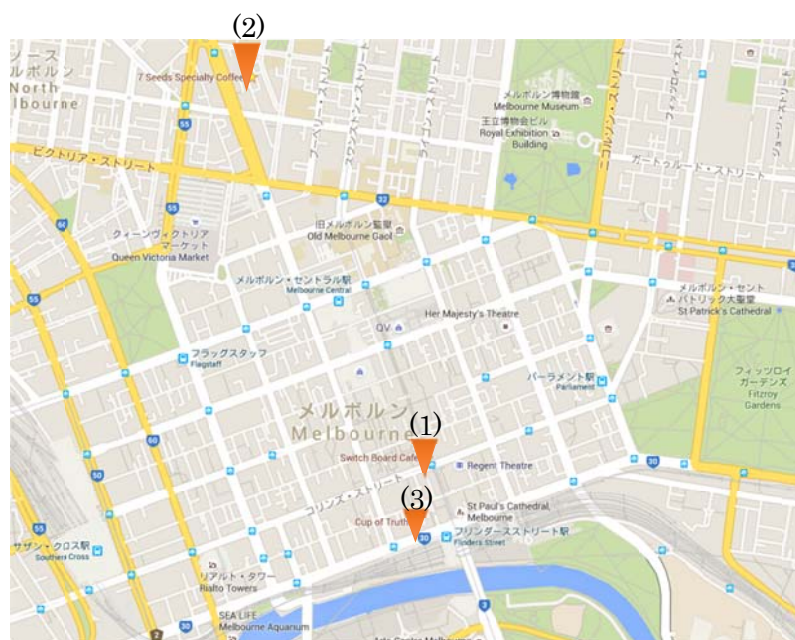
メルボルンの主要な駅である Flinders Street Station に向かう地下街にある。座席は本当に小さなカウンターのみで、テイクアウトが主体のカフェである。店員さんがとても気さくな方で、お客さんともよくしゃべっていて賑やかな雰囲気だった。

また、支払い方法にも特徴があり、カウンターにあるカップに代金を支払い、自分でお取りをとるというシステムをとっている。これは店員さんとお客さんの信頼関係で成り立っている証拠だとのこと。(住所：12 Campbell Arcade, Melbourne VIC 3066)



店の外観。コーヒーの立ち飲みバーのような感じであった。店員さんがとても気さく。

(<https://villagewellblog.wordpress.com/2012/06/13/shops-in-unlikely-places/>より引用)



CBD 周辺図とカフェの場所

この他にもメルボルンには素敵なカフェがたくさんある。前にも述べたとおり、メルボルンにはおいしくないカフェはすぐに無くなってしまってもいわれている。実際、現地に入ったお店でおいしくないコーヒーを飲むことはほとんどなかったのので、街を歩いていて気になるカフェを見つけたらまず入ってみると良いと思う。メル

ボルンでの生活を楽しむためにも、お気に入りのカフェを見つけるのはおすすめの方法だと思った。

8 所感

本プログラムで得たこと、感じたこと、将来に向けての展望に関して。
 やってよかったことや、行って見て別のことをしておくべきであったと気がついたこと、
 後輩へのアドバイスなど、同じプログラムに参加しようと考えている人はぜひ参考にして
 もらいたいページである。



メルボルン市内を通っている電車の路線図

学部四年 末續美優

このプログラムは唯一一ヶ月間短期留学できるプログラムで、理工系の英語に特化しているということもあり参加しました。海外にはよく行くため、フライトや一人で行くことには抵抗がなかったのですが、初めてのホームステイだったため、他人との共同生活や食事が一番の不安点でした。実際に行ってみると、ホストマザーは温かく私を迎えてくれました。ホームステイと言えば、大家族に大きい犬がいて、大きい家があつてというのを想像しがちですが、実際には家庭環境は全く様々でした。想像通りの家庭もあれば、老夫婦二人の家庭、他にも留学生を受け入れている家庭、マザー一人の家庭などです。私のホストは、若いキャリアウーマンの女性が一人で、シティの近くのアパートに住んでいました。部屋は2LDKほどで一人で住むには大きい家でした。ホストは料理をするのがすごく苦手なようでしたが、私のために毎日一生懸命作ってくれ、一緒にケーキを作ったりもしました。休みの日にはホストと友達とランチに行ったり、ホストのお母さんに会いに行ったり、ペットショップに行ったり、ドライブしたり、たくさんの思い出ができました。ホストとの相性は運だと思いますが、積極的に関わったり、ホストとの時間を作る努力をすることはすごく大事ななと感じました。

このプログラムでの私の目標は、スピーキング・リスニング力をあげることでしたが、想像以上に日本人が多く、至る所で日本語が聞こえていたのが残念でした。また、クラスではもちろん英語しか話してはいけないのですが、日本人同士の片言の英語で英語力が大幅にのびることもなく、意識レベルが違ったのも残念な点でした。授業ではディスカッションする時間が多かったため、私はなるべく他国の留学生の近くに座るように心がけ、積極的に話しかけるようにしました。幸運にも私のクラスの留学生はとてもフレンドリーでしゃべるのが好きだったため、授業外でもランチしたりディナーに行ったり観光したりと英語で会話する機会をつくることができ、仲良くなることもできました。また、放課後にはなるべくワークショップに参加するようにしました。ワークショップではIELTS対策の授業を行っていたのですが、授業レベルとしては正直普通の授業よりためになるなと思いました。先生がとてもユーモアのある方だったためわかりやすく楽しい授業でした。このワークショップは日本人が少なく、意識の高い学生が多かったのがすごく刺激になりよかったです。

メルボルンはシティーアワードをとるほど住むのに適していると言われていています。メルボルンと言われてすぐに特徴は思い浮かばないと思いますが、行ってみて初めてわかる、言葉にはできない魅力がいっぱいありました。実際私もメルボルンの魅力に惹かれてしまいました。天気、人々、町並み、自然、全てが素敵なところです。文化も人々も多様性があり複雑に混ざり合いながらも、お互いが尊敬・尊重しながら生活をしている場所は他にはないと思います。私はこの一ヶ月間で、様々な人と関わり、様々な文化に触れ、視野が広がりました。世界で活躍できるグローバルリーダーになれるようもっと英語の勉強に励みたいと思います。

学部三年 宮川まどか

今回の留学は自分にとって、何もかもが初めての経験であり、毎日何かを感じ、学んだ。そんな中、特に強く感じたことは、「コミュニケーションの面白さ」である。この面白いという言葉は単に人と話すと楽しくて、ワクワクするというのではない。時には強い言葉で傷つくこともある。日本にいる時もさまざまな場所で新しい人と出会い、コミュニケーションをとることで新しい考え方を知ることや、自分との感じ方の違いを痛感することもある。しかし、今回は国際的に大きな視野で人を見て、感じることができた。とても面白い経験である。私は、大学でできたオーストラリア人の友人に、「日本人は面白くない」と言われた。その友人いわく、日本人はみんな同じことを話すそうだ。自己紹介ひとつするにも、口を合わせて「趣味はテニスです。学科は〇〇です。」と話し、何か質問しても Yes か No でしか答えない。繋がらない返事しかできないのである。私は日本人としてショックを受けたが、そのような人にはなりたくないと思った。確かに、オーストラリアで生活していると、驚くところで会話が始まった。例えば、ドラッグストアやカフェの店員、バスの運転手である。挨拶が”How are you?”から始まるのも、会話が続く特有の英語である。この会話が好きで、どんな人ともコミュニケーションを続けていけるということは素晴らしい国民性であり、私たち日本人も見習うべきだと思った。大学では、オーストラリア人の他に、中国人やマレーシア人、サウジアラビア人と友達になったが、それぞれ性格や文化が違うなかで、お互いの国の話や生活の話をすることができた。このように、たくさんの人と出会い、お互いの話をする中で、「コミュニケーションの面白さ」を感じることもできたのである。

また、オーストラリアの広大な自然を肌で感じることも素晴らしい経験となった。週末にグレートオーシャンロードとフィリップアイランドを訪れた。グレートオーシャンロードは世界で最も美しい道と呼ばれている。バスを降りてその景色を見た時、鳥肌がたった。言葉では言い表せないほど美しく広大で、そんな景色を見ることができ、とても嬉しく思う。フィリップアイランドでは海から巣に帰ってくるペンギンを見ることができたが、広い海から、子にエサを与えるために帰ってきた小さなペンギンたちをみて、とても優しい気持ちになれた。そのように、日本では絶対に経験できないような景色を感じることもでき、この時感じた感動は一生大切にしようと思うことができた。

また、肝心の英語力であるが、自分の中では一ヶ月ではまだまだ話せるようになれなかった。努力不足に感じた。リスニング能力は始めの頃にくらべ、あがったように思われる。しかし、会話をしている、相手の話を聞き取れ、理解することができても、ボキャブラリーが貧しいために言葉が出てこず、詰まってしまう伝えられないために悔しい思いをたくさんした。この悔しさを胸に、日本でも英語の勉強を続けていきたいと思う。毎日英語を聞くことが大切で、少しでも海外での環境に近づけることができれば英語の能力はあがるのではないかと考えている。

学部三年 沢崎鷹

今回参加した理由としては、英語力を伸ばしたいというのもそうであるが、異国の地で一人で生活しておきたいというのがあった。中学のころから修学旅行で行ったりとなにかと毎年のように海外には行っていたが、英語を話さなくても生活できることはわかっていたので、行く前に立てた目標はあたかも現地の人であるかのようにメルボルンで普通に生活をして過ごすというものであった。英語を話すことも聞くことも自由にできない分毎日毎日生きるのに精一杯であったし、本来ならゆっくりくつろげる家ですら英語でやりとりなくてはならなかったし、とにかく疲れた一日であった。そういうわけで特に面白かったことをしたわけではなかったが、それでも楽しかったことはいくつもあった。

個人的には一番行けてよかったと思ったのが、フットボールと呼ばれるメルボルン市民なら男性女性関係なくみんなが見るスポーツである。18 チームもあり、名前と本拠地とイメージの動物をみんな知っていることに驚いたが何よりスタジアムの熱気に驚いた。僕がメルボルンにいた時期がちょうどシーズンの最終戦からファイナルステージを見ることのできる時期だった。シーズンで上位8位のチームがファイナルステージに残ることができ、最大で四連勝すると優勝、という仕組みである。ホストマザーに行きたいと日本を出る前から言っておいたからかもしれないが、すごくいい席を用意していただいた。その日は後半5分ほどで逆転されてしまったが、その瞬間はスタジアム全体で非常に盛り上がり楽しかった。個人的に一番よかったのが、ファイナルステージ一回戦の試合である。負けたら終わりのトーナメント制であるため、試合開始前には国歌が流れたり、円陣を組んだり、今まで見た試合の雰囲気とは異なっており鳥肌が立ったのを覚えている。周りのサポーターも気合が入っていて点を取るたびにになにかよくわからない英語を叫んでいたり、点を取られると全身で悔しさを表現していたりととにかくどこを見ている楽しかった。その試合の動員数が9万人とわかったときは日本にもこういうみんなが好きで注目しているスポーツがほしいなとも思った。

楽しかったことの二つ目はホームステイの子と会話していたその時間である。僕が英語を聞き取れないことをわかってくれてか、ずっとゆっくり喋ってくれてその上に必要な時には iPad を使ってくれて非常に楽しい夕飯を毎日過ごせた。彼が車好きということで一緒に車の番組を見たり、お互いがわかる任天堂の話やゲームをしたり、ディズニーを見たり教えてもらったり、など有意義な時間が過ごせてよかった。13歳でとても細いが当然ではあるが流暢な英語を話しているので初めは大人だな、とも思っていたが、何度も話していくうちに子供っぽさも垣間見られてとても仲良くなれたのがやはりうれしかった。

最後に英語ができなくて不便だった出来事を何度も経験したからこそ英語をもっと勉強していきたいと思えるようになったこともこのプログラムに参加してよかったと思えることの一つである。

今回の海外語学研修は自分にとって初めての留学かつ海外渡航だったので、渡航前はとても不安で緊張していたが、徹底した事前学習と CIEE・大学によるサポート、同プログラムに参加した他のメンバー達が居たおかげでほとんど何の問題もなく1ヶ月間の語学研修プログラムを終えることができた。共にプログラムに参加したメンバーは心強く、一緒に参加することができて本当に良かったと思う。英語で会話したことなどほとんど皆無で、事前に学習する時間も取れなかったため、現地に着いていざ会話するとなるとやはり自分の伝えたいことをなかなか上手く伝えることができず、とてももどかしい思いをした。もし、今後同じようにプログラムに参加する人がいれば、強く日本での事前学習をすることを勧めたい。ただ、そうでなくとも自分の意思を伝えようとする姿勢を強く持つことが大切なのではないかと実際に生活をしてみて感じた。

ホームステイ先は夫婦に子供3人、犬が1匹、留学生が1人と、とても賑やかな家庭であった。長男とは一緒にゲームをすることが多く、食事の時間には子どもたちと会話したり、逆にこちらが日本語を教えることもあり、ホームステイでの生活はとても楽しいものだった。今後、子どもたちが大きくなった姿を見るのが自分にとっての大きな楽しみである。

Clayton キャンパスでの漫画ライブラリーという日本語クラブの学生が使用している部屋では日本に興味のある現地の学生と交流することができ、他愛もない会話をして楽しんだり、日本のことについて英語で教えたりと英語を使うことができる大変貴重な機会を得られる場所であった。今後、同じプログラムに参加する人には是非1度足を運んでみることをおすすめしたい。漫画ライブラリーで友達になったたくさんの学生とは、今後もずっと友達として交流していくであろうというほどに仲良くなり、日本に来る予定の友達とは日本で一緒に観光をしたり、家に招いたりする約束までしている。

今回の研修で非常に強く感じたことは、海外に居るからといって受動的であると英語を使う機会は意外にも少なく、英語を使わなくても生活できてしまうため、自分から積極的に行動することが非常に大切だということである。また、日本の学生と多くの時間を過ごしてしまい、せっかくの機会に日本語をたくさん使ってしまうことが多く、英語を使うために自分はあまり積極的に行動することが出来なかったため、この点においては非常に反省をしている。慣れない土地での生活はやはり精神的にも身体的にも疲れてしまうものであるが、せっかくの海外生活を全力で楽しみ有意義なものにするためにも、現地の人々と交流できるようなイベントや場所を探し、積極的に異国の人々と会話する機会を自らどんどん作るべきであると感じた。

結果的にはあまり英語を使う機会を増やすことは出来なかったが、この反省や研修を終えたという自信を元に、日本での英語を使う機会を自らどんどん増やしていきたいと考えている。今回の研修では他大の学生、現地の学生など様々な人々と関わることができてとても良いものだった。

学部三年 伊東紀碩

私は英語力を上げたいと思い、このプログラムに参加した。海外で一か月も過ごした経験は無かったし、ホームステイも初めてだったため、行く前は不安でいっぱいだった。しかし、実際にオーストラリアに着くと、不安は吹き飛び、とても楽しい充実した一か月を過ごすことができた。このプログラムを通して、大きく成長することができた。自分が得たと思うことは、大きく分けて三つある。

一つ目は、やはり英語力が上がったことだ。ホストファミリーとの会話や、モナシュ大学の授業を通して、英語に対する抵抗が無くなった。オーストラリアに着いた初日、初めてホストファミリーに会い、英語で会話したが、その時に謎の疲れを感じた。最初のころは、英語を話すのに抵抗があり、体力を消耗していた。しかし、ホストファミリーや留学生との会話を通じ、英語を話すのがしんどくなくなり、軽い気持ちで英語を話せるようになった。そうして最終的には英語を話すことが楽しくなった。日本に帰ってからも、外国人の集まるパーティーに参加するなど、英語をもっと使いたいと考えようになったのは、大きな成長だと思う。あとは、外国人の醍醐味であるジョークを素早く言えるようになれば、外国の人ともっと親しくなれると思った。

二つ目は、規則正しい生活がいかに大切かに気づいたことだ。オーストラリアの人は、23時には寝て、6時くらいに起きる生活を送っている。一か月間このライフスタイルで過ごしていると、嘘のように元気に生活を送ることができた。日本に戻ってからも規則正しい生活を継続したいと思った。

三つめは、自分で考えて行動することの大切さを学んだことだ。日本にいる時は、親や友達に頼りきっており、適当に生活していた。しかし、オーストラリアに行くと、親も友達もいなくなったため、自分で行動しなければいけなかった。このような環境におかれて改めて周りの人の重要さに気づくことができ、また自分だけの力で生活していくことの大切さに気づいた。これから研究室選びや、就職活動など、人生において最も重要な選択をする。真剣に考えて、後悔しない選択をしたいと強く思った。この留学は、自分を見つめなおすいい機会になった。

また、空き時間に観光することができたのがよかった。グレートオーシャンロードや、フィリップ島やパフフィンビリーに行ったほか、シドニーに行くこともできた。勉強だけでなく、観光もでき大満足のプログラムだった。特にグレートオーシャンロードはとてもきれいだだったので、メルボルンに行ったらぜひ行ってほしい。

今回の留学は、将来の進路に大きな影響を与えることになると思う。海外で一か月過ごしたことで、やはり海外は楽しいなと感じ、問題である英語は日常会話程度ならできるという自信がついた。将来、海外で仕事ができる機会に恵まれたら、前向きに参加しようと真剣に考えるようになった。

学部三年 日比滉大

今回私は語学力向上の目的でこのプログラムに参加しました。私は昨年生物系の世界大会に参加したのですがその際、自分を含め日本人の英語力の低さを痛感しました。日本と同じアジアの国でも、中国人や韓国人は英語が流暢に喋っていたのです。これが動機となり、このプログラムに参加しました。今回は私にとって初めてのオーストラリア訪問であり、また1か月海外に滞在するという経験も初めてでした。

まずメルボルンに滞在して思ったのは、やはり5年連続住みやすい街 No.1 というだけあって、本当に住みやすい街だなと感じました。天気は基本的に晴れていますし、広々とした公園、暖かい人たち、広い土地、広い家などなど、東京にいるより、はるかにストレスが溜まらずに生活できそうな環境でした。今後の生活や老後の生活をメルボルンで送ろうかと考えてしまうくらい素晴らしかったです。オーストラリアが多国籍国家であるのもそのように考えた理由の一つかもしれません。メルボルンにはいろいろな国のレストランがあり、いろいろな国籍の方が住んでいて、お互いの文化を優しく受け入れているような気がしました。オーストラリアに来る前は、欧米人のような彫りが深い顔立ちの人が多いたろうなと思っていたのですが、行ってみるとアジア系の人結構多かったです。そのため自分がメルボルンに引っ越してもすんなりと受け入れてくれそうな感じでした。

また今回の滞在を通して、英語をしゃべることが苦ではなくなり、むしろ楽しいことだと思えるようになりました。滞在して最初の頃は苦で、自分の言いたいことが言えずに沈黙したり、単語を挙げるだけで精一杯でした。しかし相手もやさしい方が多く、私のつたない英語に耳を傾け、理解しようとしてくれました。私もそれに応えようと、100%ではなくとも自分の伝えたいことを、関連した単語を何個も羅列したり、例をあげたりして話しました。この1か月の滞在では自分の英語力が飛躍的に成長したわけではないのですが、帰国直前にはホストファミリーに「滉大の英語力は最初に比べてすごく伸びたよ」とほめていただいたり、また自分で振り返ってみても英語力は向上したなと思います。

そして今回のプログラムで一番嬉しかったことは、海外の友達を作れたことです。Monash UniversityにはManga Libraryというものがあり、彼らとはそこで知り合うことができました。クレイトンキャンパスで授業があった時には放課後はできるだけそこに行って交流をはかろうとしました。先ほど話したように最初のうちは英語を聞くこと、しゃべることに慣れず楽しく会話をすることはできなかったのですが、メルボルンで生活していくうちにだんだんと改善され、楽しく話すことができるようになりました。仲良くなってからは土日に遊びに行くのを誘ったりして、楽しい時を過ごすことができました。

今回のプログラムを通して海外で生活を送るという選択肢が増え、またこの一か月で自分の語学力は向上しましたがそれでもまだまだなので今後も継続して勉強しないと強くないと思います。今後は派遣交換留学も視野に入れつつ、英会話スクールに通い英語力のさらなる向上を目指したいと思います。オーストラリアで出来た友達は今度日本に来る

予定なので、彼らとさらに楽しく会話ができるように頑張っていきたいと思います。

学部三年 松井将洋

この留学プログラムは東工大の超短期派遣プログラムの中では4週間という1番長い期間のもので、これだけ長期間いたということもあって得られたものもあった。特に学んだことの中でも大きいものは二つある。

一つ目は、オーストラリアという移民の国で様々な国の人々と出会い、交流していく中で英語力はもちろん現在のグローバル化していく社会を身をもって感じる事ができたことである。言い換えるなら国際意識を高めることができたということである。オーストラリアには純粋なオーストラリア人というのは実はそんなにおらず、中国人、台湾人、マレーシア人、欧州からもたくさんの方が来ており、特に中国人はかなり多く自分のホームステイ先も中国系で、教会の神父なのだが、多くの中国人が集まっていた。オーストラリアで一番見たのは中国人といってもいいくらいいた。そんな中国人も自分の国で英語をかなり学んできている人は少なく、ホームステイ先にいた中国人とも英語でコミュニケーションをとるのにはかなり苦労した。しかし向こうから見ても恐らくこちらと同じことを考えていたと思われる。中国人留学生は二人いたのだが隙あらば二人で中国語を喋り、自分にきつい思いをさせてきたことからそれが言える。自分も研修中他の日本人学生とは英語をしゃべらなくていい時は常に日本語を話していたし、やはり人間極力母国語を使いたい欲が強いのだろうということは言うまでもないが、それでは世界では通じないし、特に日本語は日本でしか使えないようなものなので、こういった経験を通じて改めて英語の重要性を認識できたと思う。

二つ目は、自分の国、すなわち日本で学んだものの理解を深め、かつそれを英語で説明できることの必要性である。特に宗教に関して日本人は無宗教ということを使うと説明しにくく、場合によっては亀裂が生じる場合があるから、なんか信じていることにして亀裂が生じるのは防ぐようにアドバイスをくれた人もいた。よくよく考えてみるとなぜ日本人が無宗教なのか日本語でも理解していないのに英語で説明できるわけがないし、一部の宗教に対し理解を示せない日本人も外国人から見たらよくわからない存在なのかもしれない。そんな多様な考え方を自分の国の文化を中心に理解する必要があると思った。他にも日本の土地やお菓子などについて聞かれた時も似たようなことを感じた。

文系が身につけるような知識は外国人と、もっと言うと世界と繋がるために必要なんだ、というのがこのプログラムを終えて最終的に感じたことである。また、1ヶ月といっても他の大学の水準ではかなり短く少しでも長い期間滞在していたほうがいい経験になるのでこのプログラムをとって本当に良かったと思う。阪大生がいることで日本人同士でも高めあえるし、今はSNSでどこの人々ともつながりやすいので、このコースを取って視野を広げることを自分は強く勧める。

学部三年 松久和歩

1ヶ月というとても短い間でしたがとても満足のいく超短期留学とすることができたと思いました。

1ヶ月で英語が出来るようになるかと聞かれると、自分自身出来るようにはあまりなりませんでしたが、1ヶ月過ごしていく間には、自分の未熟な英語でもホームステイ先の方々や授業と一緒に留学生の人たちと意思疎通が出来、多少自信がついた一方で、自分の伝えたいことは10あるのに自分の英語の力では2,3程度しか伝えることが出来ない、自分の力のなさを実感し、これからの英語の学習に対してしっかりとした目標を持ってました。

また、1ヶ月の間滞在していたため現地での友達を作ることが出来たこともよかったです。今まで海外には何度か行きましたが滞在期間も短くまた観光が中心だったため、これまでそのようなことはありませんでした。モナシュ大学にはマンガライブラリーという日本語のマンガが置いてある図書館があり、そこには多くの日本語を学んでいる学生がいました。自分は何度か訪れたのですが楽しい会話をする事が出来ました。また City Campus で行われる Monash English では自分たちと同じく英語を勉強しに来ている海外からの留学生がたくさんいました。クラスと一緒に過ごしていくうちに彼らとも仲良くなり何度か遊びに行ったり、ご飯を食べに行ったりしました。このような経験は今まで自分はしたことがなかったのでもとても良い経験になったと思います。

また、メルボルンという町はとても過ごしやすくよい町だったと思います。まず町並みがすごくきれいでした。メルボルンを代表する駅である Flinders Street station にはイギリスを思わせるような歴史ある駅舎があり、その他にも州立図書館やアーケード等とてもきれいな街並みでした。またカフェ文化が根付いているためメルボルン市内には多くのコーヒーショップがあります。週に3,4回通っていましたがとても良かったです。また週末には様々な場所に出かけましたが、それらもとても素晴らしかったです。グレートオーシャンロードの美しい海やビーチ、フィリップ島のペンギンパレード、グランピアンズ国立公園の雄大な自然などすべてが日本では体験できないような素晴らしいものでした。

自分のこの1カ月のメルボルン滞在で一番反省していることは明確な目標を立てずに1ヶ月を過ごしてしまったことです。一応自分の持っていた目標は毎日夕食後短くてもよいので話をするというもので、達成はしましたが、もっと具体的な目標や学習計画なども立てておけばよかったと思いました。

1ヶ月というのはとても短くすぐに終わってしまいます。きちんとした目標がないとメルボルンに行ってから毎日が目まぐるしく動いていて日々過ごすことで精一杯になってしまいます。来年の春にもモナシュへのプログラムがあるそうですが、旅立つ前に是非しっかりと目標を持っていてみてください。

学部三年 目黒創太

私が本プログラムにおいて向上を目標としていたことは主に二つであった。一つ目は英語でのプレゼンテーション能力、二つ目は英語の会話能力である。それぞれについてある程度向上することができたので具体的なその要因などについて順に詳細を記載する。

まずは第一のプレゼンテーション能力について述べる。私のプレゼンテーション能力は本プログラム参加前と比較するとかなり向上したと思われるがその要因は主に三つある。プレゼンテーションにおいて注意すべきことについて明確にリスト化したこと、またプレゼンテーション後に先生から評価やアドバイスなどが記載されたプリントが配られたことによりプレゼンテーションの客観的な振り返りを行うことができたこと、何度もプレゼンテーションを行ったことが挙げられる。特に何度もプレゼンテーションを行ったことにより人前において緊張するということがなくなり、少し落ち着いてプレゼンテーションを行うことができるようになったと思う。そもそも研究室所属もしていない学部生であるため、私には英語どころか日本語でもプレゼンテーションをする機会というものがあまりなかった。正確に言うと英語の講義で週一ほどプレゼンテーションの講義があったのだがこれのみでは自分の直すべきポイントが明確にならず、結局この能力が向上したという実感が湧かないまま講義が終了した。そのため、本プログラムにおける私自身の大きな目標のうちの一つとしてこのプレゼンテーション能力の向上を掲げており、実際に向上を確認することができたことは自分にとってプラスとなった。

次にもう一方の英語の会話能力について述べる。これが向上した理由については単純にホームステイ先のホストファミリーや他の留学生などと英語で会話をしていたからであると考えられる。私は日本語での会話能力さえも乏しい。そのため国語ではない英語についてはなおさらであり、本プログラム前、そして本プログラム開始から一週間ほどは片言でしか話すことしかできなかった。この原因としては話したい日本語を即座に英語に変換することができずにもたついてしまったことが考えられた。そのため本プログラム中において使うと考えられた単語についてはまとめて覚えるように勉強をすすめた。このプログラム中においてこの弱点を完全に克服することはできなかったが弱点の理由がわかったことから、勉強する際に対策を立てることができるようになった。

このように本プログラムから主に以上のような二つのスキルを向上させることができた。今後研究室に所属するにしても企業に入ったのちにしてもプレゼンテーションをする際など様々な場面で英語を使う機会があると考えられる。そのためこの留学経験は今後のキャリアに十分生かしていくことができる貴重な経験であった。

学部三年 劉曉夢

私は長期にわたって英語圏に滞在したことがなかったので、英語圏の国で生活するとはどのようなものか経験するために本派遣プログラムに参加した。1か月の語学研修を通じ、英語力の上達は当然のこととして、オーストラリアの文化に適応することも当初の目標として挙げていた。研修を終えた今でも、オーストラリアでできた友人やホストファミリーの人と連絡を取り合っているため、その点ではこの研修は成功したと考えている。

このプログラムでは、モナシュカレッジに1か月間通い、英語の講義を受けた。英語の講義ではリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングを満遍なく扱い、いずれの能力も向上させることができた実感している。特にスピーキングについては日本で鍛錬できる場所が少ないので、現地の講義によって鍛錬できて大変ありがたかった。スピーキングの練習ができることこそが留学に行く最大の利点の1つだと私は考えている。1か月モナシュ大学で英語の講義を受けたことで、特に発音の上達を実感した。初めのうちはホストファミリーにも自分が話している英語が通じず、苦勞していたが、時間が経つにつれ通じるようになり、発音を褒められるまでになった。帰国した今も、英語の大切さを痛感し、東工大のイングリッシュカフェなどにも参加している。

また、私は1か月の滞在中を通じて国籍問わずさまざまな友人ができた。その友人たちとグレートオーシャンロードやフィリップアイランド、グランピアンズ国立公園やシドニーなどの場所に旅行した。いずれの場所においてもその場所特有の自然や雰囲気を楽しめた。また、今回の滞在中を通じて天候の悪い日はなかった。やや霧雨ほどの雨は降っても、傘が必要になるほどの本降りの雨は一日も降らず、とても過ごしやすかった。メルボルンからさまざまな場所に旅行に行ったが、少し日程を詰め込みすぎたと反省している。シドニーへは日帰り旅行で行ったが、ハーバーブリッジとオペラハウスしか観光できずにすぐにメルボルンへ帰ってくる羽目になった。今後行く人へのアドバイスとしては、外国に行ってもさまざまな場所を観光したい気持ちはわかるが、詰め込みすぎても1つの場所を満喫できないので、行く場所を厳選してじっくり観光することをお勧めする。

今回の留学を通じて自分の中で英語への意識が大きく変わった。留学に行く前から英語の大切さについてはいろいろな人から口酸っぱく聞かされていたが、実際行って見てより英語の大切さを実感した。メルボルンでさまざまな場所に行ったが、想像以上に日本人が活躍していて驚いた。モナシュ大学のアドバイザー、博物館のガイドなど日本人が流暢に英語を話し外国人とコミュニケーションをとって羨ましく思った。今後の私たちの活躍の舞台が世界である以上、英語は必須条件であるから、大学在学中に恵まれた東工大の英語学習環境を有効利用しようと強く思った。

学部二年 青山航大

今回の留学プログラムでは、自分が最低学年だったため、多くの先輩の中に混じらせて頂きました。先輩方はいるもの、生活は実質自分一人なので、海外で暮らせるかという不安を抱えていて、それを払拭させるために、出発前の一週間は、留学の準備や目標についてずっと考えていました。

しかしオーストラリアのホームステイ先に着いてみると、自分があまりにもオーストラリアを日本とかけ離れている存在と思い込んでいたことに気づき、肩の力も取れました。自分のホームステイ先では、ちょうど同じ日からベトナム人の女の子がホームステイをするみたいだったので、お互いの国から持ってきたお土産を交換することで、仲良くなりました。残念ながら、ホームステイ先の方は、家族と仕事(ホームステイ)を別に行っている感じだったため、あまり話す機会がなかったのですが、このベトナムの子とは、一緒に食事をする時に、いつも楽しく会話していました。心配していた英語も自分が予想していたより通じました。行く前に英語を勉強していたことも効果があると思うのですが、何かを伝えようとするときに大事なのは言語じゃなくて気持ちということを強く実感させられました。

授業が始まってからは、プレゼンの練習やパワーポイントの作成等、自分があまり経験したことのないことをいろいろとやらせて頂く日々が続きました。残念ながら、最終発表はうまくいかなかったのですが、先生から発表についてアドバイスを頂いたことや、先輩方のプレゼン発表を見る機会に遭遇でき、今後自分が学部高学年になって研究成果などを発表する時のための参考になったと思います。

それから、オーストラリアで最も大きい成果は、オーストラリアに友人ができたことだと思います。留学の中盤で、自分の英語力が本当に伸びているか、オーストラリアで何をしているのか分からなくなった時期がありました。この留学が今後につながるためには、何を自分がすべきか分からなくなったのです。そこで、この留学を薦めてくれた一人である従兄弟にアドバイスを求めたところ、留学で英語力は簡単に伸びないけども、楽しいという経験やかけがえのない友人の存在が英語を学ぶ原動力になるという返信を頂きました。次の日、勇気を持って外国の学生に話しかけたところ、思っていたよりも仲良く話すことができ、別の日に何度か街を案内してくれました。本当に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。今でも彼らとは、Line や facebook など連絡を取り合っています。このようなかけがえのない関係を築くことができたことに感謝したいです。

今回のプログラムを運営していただいた東工大国際連携課を始めとする皆様、本当に素晴らしい体験をさせて頂き、ありがとうございました。この経験を糧にして、日々英語はもちろん、それ以外の様々なことも積極的に励んでいきます。

学部二年 山本雅之

今回は、理工系のための英語研修プログラムということで興味を持ち参加させていただいた。4月の時点で今年は夏休みにどこかに英語力向上のために短期留学をしたいと思っていたところにこのプログラムを見つけて、まさに自分にうってつけだと思ったからである。4週間という、短期のプログラムにしては長い期間であったが、それでも終わってみるとかなり短かったように感じる。しかしながらかなり充実して、中身の濃い4週間であった。

はじめに今回の研修を終えて、英語自体の能力については正直それほど伸びたとも言えないと感じる。1ヶ月という短い期間であったため仕方のない部分もあるであろうが、それでもいくつかの反省点はあげられる。一つは、留学前の英語の準備不足である。留学に行く前は向こうに行ったらなんとかなるだろうと気楽に構えていたが、実際に行ってみたらその考えは甘かったことに気がついた。英語を話そうにも、(基礎的な)単語や文法が出てこないのである。また、英語を聞くときにもわからない(基礎的な)単語が頻繁に出てくるのである。向こうについてから、留学前にもっとしっかりと勉強しておけばよかったと後悔した。二つ目に、研修の最初こそこれから英語をやるのだというやる気に満ち溢れていたが、途中から段々とそのやる気が低下してしまった点である。はじめのうちは積極的にホームステイファミリー等と会話をしようとして試みていたのであるが、途中から、会話にうまく混ざれないことが苦しくなり、自室にこもりがちになってしまったのだ。しかし最後の方はこれではダメだと思い、なんとかコミュニケーションを取ろうとがんばれたと思う。

反面、今回の研修では純粋な英語力以外にも得たものはたくさんある。まず、英語を学ぶ上での姿勢や勉強法などを学ぶことができた。また、オーストラリアは多文化社会ということで、様々な国の文化に触れることができた。放課後に大学内で開かれていたワークショップに自主的に参加したのも、内容が実践的でかなりためになった。現地の学生や他の国からの留学生など、たくさんの仲間と巡り会えた。中でもマンガライブラリーでのジャパニーズクラブの学生との交流はこの留学の中で最も有意義だった体験の一つである。休日に二日間使って行ったグレート・オーシャン・ロードとフィリップアイランドのバスツアーは純粋にとっても楽しく、留学中の一大イベントであった。その他の観光地もいろいろなところに行くことができ、中でもパフフィンビリーの蒸気機関車はかなりエキサイティングだった。

留学を終えて、まず英語をもっと勉強しなければならない、したいというモチベーションが強くなった。日本をひとたび出ると日本語を話せる人は殆どいなくなり、英語を使ってのコミュニケーションが主となるので、将来海外で仕事、研究をするなら英語を話せることが必須である。今回の研修でそのことがより強く、身を持って分かった。またオーストラリアでは中国語を話す人も多く、中国語を本格的に学んでみるのも良いのではないかと感じる。今後の展望として、学部のうちに今度は半年など長期での留学をしたいと思うよ

うになった。また、学部卒業後は、海外の院で研究をしたいという想が強くなった。今回の研修は、失敗した部分もあるが、全体として参加してよかったと思えるものとなった。

学部二年 劉安越

このプログラムには英語力を向上させることを目的に参加した。なので、英語圏の国に留学することは楽しみであった。結果的に1か月で英語力を飛躍的に向上させることは難しいとわかったが、それでも日本に帰ってきてからも継続的に英語の勉強を続けるようになったので失敗だとは思っていない。

終わってみて思うのが、留学というよりも旅行の要素のほうが強くなってしまったなというのが率直な感想であった。もちろんものすごく楽しかった上に、自分も進んで遊んでいたのだからこんなことをいう権利は無い。自由時間がものすごく長いので、そこをどう利用するかは、結局は個人の意識の差だと思われる。僕は後半になってこのままでいいのかと気づき、自由時間に遊ぶことはやめて、しっかり勉強するようになった。

まずは英語研修に関する感想から。モナシェイグリッシュの授業は幸運なことにレベル6に配属され、他の人の意識も高く良い環境で勉強できた。とくに日本以外の国から来た留学生の英語力がかなり高く、話していて良い刺激になった。クレイトンのほうの授業は生徒が全員日本人であり、先生の授業を聞くというよりも生徒同士で会話したりプレゼンをしたりということがメインであったので、どうしてもモナシェイグリッシュに比べて効果が薄いように思えた。ホームステイ先はあまり会話の多くない家庭であったが、もう一人ベトナムからの留学生がおり、その人とかなり会話をした。最終日付近では歴史や国の価値観の違い等を深夜2時くらいまで語り、とてもいい経験になった。このプログラムで英語力を向上させたいのであれば、本当に意識が一番大切だと思う。9月末はみるみる会話も聞き取りも良くなっていった気がした。

次に英語研修以外について。メルボルンは想像よりはるかに生活しやすく、楽しい町であった。物価が高いことを除けば何一つ不満点が無い。平日はCBD内を散歩し、週末は遠いところへ旅行するのが基本であった。自然も建造物も綺麗で美しい町というのが1番の印象で、どこに行っても飽きなかった。そして、そういった場所へ大学生で集まって行くので、楽しくないわけがなく、毎日毎日とても楽しい日々が過ごせた。1か月で色々な人と仲良くなれ、東工大で少ないコミュニティの中で生活していた僕にとって夢のような1か月であった。僕は、学習環境の原因もあるのだが、現地の友達をほぼ1人も作らず、日本の学生の友達がたくさんできた。このような人は少ないと思うが、僕は全く後悔していない。

このプログラムの成果はかなりクラスに左右されると思う。事前のクラス分け試験で分かれたクラスによってかなり異なる1か月を過ごすことになる。レベル6は午後授業であったので毎日ほとんど観光ができず、みんなキャンパスで朝から勉強していた。反対に午前授業のレベル5のクラスは、午後はかなり観光していた印象があった。

最後に、このようなプログラムに参加できてとても幸せだ。とても密度の濃い1か月が過ぎせた。また1年後か半年後の留学をする予定なので、今回の経験を生かそうと思う。担当の方々、東工大のメンバーのみなさんに感謝したい。

修士一年 王丹

メルボルンに関する感想：

初めてメルボルンに着いた時に、メルボルンの綺麗な空に目を奪われました。日本の空と違い、色がしっかりした青い空と白い雲が土地から近く、全体が自然に馴染んでいる感じがしました。町の中心に行くと、びっくりするほど人種が多いです。そのため、食のバラエティも富んでいます。人々が親切で、ただ目があった人にも優しく挨拶をしてくれます。友好的で、すごく受け込みやすいです。

大学に関する感想：

初めてモナシュ大学で授業を受けた時に、モナシュ大学でのすごく自由な雰囲気を感じました。大学の中にはショッピングセンター、コーヒーコーナー、レストラン、映画館などが設置されています。大学生も様々な国から来た留学生が多く、両親が外国国籍で、メルボルン生まれの人も多いです。ほとんどの大学生の雰囲気は明るくて、みんな自分が好きな研究分野を勉強し、しっかり将来の夢を持って進んでいる人たちが多くです。彼らが夢を追っている様子は私に強い刺激を与えました。

ホームステイに関する感想：

ホームステイの経験は今回のプログラムで一番魅力的なところだと思います。一人で現地のホストファミリーと生活し、英語だけでコミュニケーションをする場を作ってくれました。そして、英語だけではなく、自分のコミュニケーション能力も鍛えられました。メルボルンでは通常夜6時ぐらいに仕事が終わって、ほとんどの人が家に帰って、食事の準備をします。朝ごはんは昼ごはんはコーヒー、クッキー、サンドイッチなどの軽食を食べるのがメルボルンの習慣なので、ディナーはかなり重視されています。ディナーの手伝いをした時、必ず「今日は何をしましたか」という風に聞かれます。それから話が展開できます。ディナーが重視されているので、ホストファミリーから6時半までに家に着かなければいけないと言われますが、それもある意味で家族との時間を大事にするというカルチャーを表していると思います。ディナーでは1日の感想としたことをシェアして、それぞれの意見を言います。びっくりしたのは、両親と子供の間は一切上下関係がなく、子供を大人として、意見を聞き、決定を尊重していたことです。なぜ大学で出会った人が若いのに、自分なりの意見を持っているのかがかりました。

今回のメルボルン短期語学研修プログラムでコミュニケーションに関する新たな認識ができました。初めて英語圏に留学するので、行く前に、自分の英語に自信がなくて、かなり緊張しました。しかし、実際に感じたのは、英語の文法の正しさを無視して、とにかく周りの人に話しかけることが大事だということです。英語を使えば使うほど、英語でのコ

コミュニケーション能力が上がります。そして、コミュニケーションでは語学が全てではなく、場合によって、行動が言語よりもっと強く自分の伝えたい意味を表すことができるということに気づきました。

修士一年 佐川夏紀

今回、私がこのプログラムに参加した理由は今夏が学生のうちに留学のできる最後のチャンスであると思ったからです。もともと海外に旅行することが好きで、4年生になって研究室に配属されて以来、研究室には常に留学生がいた為英語を話すことにはあまり抵抗はなく、もっと流暢に英語を話せるようになりたい、海外の人々と英語を使って積極的にコミュニケーションをとってみたいと考えていました。

実際に1ヶ月留学してみて感じたのは、1ヶ月という期間は長期留学をする前に行くには最適であるが、語学力向上のために行くにはその目的を達成させるのは非常に難しいということを感じました。それに関しては、オーストラリアに行く前から友人から話は聞いていたのですが、その1ヶ月の使い方次第で自分の現状の英語力を理解し、弱点を掴めれば効果的な勉強も可能であるということもわかりました。私は、リスニングとスピーキングをとにかく伸ばしたかったので、授業中はもちろんですが、家に帰ったらホストファミリーと積極的に話すこと、オーストラリアの友達を作って会話をたくさんすることを心がけました。家に一人でいる時もニュースをサブタイトル付きで見たり、英語の本を読んだりととにかく常に英語に触れているようにしました。そうしているうちに少しずつホストマザーや友達の言っていることをより多く理解できるようになったり、自分から何かを伝えようとする姿勢をもつことができるようになったりしました。

私は都市計画を勉強しているのですが、メルボルンの街並みは非常に綺麗で、公共交通がしっかりと整備されている印象を持ちました。イギリス風の歴史のある建築とトラムが街中を走る風景はヨーロッパに来たかのような感覚になりました。世界の住んでみたい街ランキングで首位に君臨しているメルボルンですが、住環境もよければ現地の人々の人当たりも良く、とても快適に過ごすことができました。オーストラリアは移民の国であり、たくさんの人種が入り混じっています。アジア系の方も多く、中心地にはチャイナタウンがあったり、様々な国のレストランがあったりしました。色々な国の文化を受け入れ、お互いを尊重しているスタイルはなかなか日本で実感できないことであつたので、非常に好感がもてました。

色々なことを感じた1ヶ月でしたが、この期間を通して、世界に出て仕事がしたいという気持ちが非常に強くなりました。それに対して私の英語力には課題が多くありますが、それを克服して、広い視野を持ってより豊かな人生を送っていきたいと強く思いました。そういった気持ちになれたことがこの留学の一番の収穫であると感じました。

修士一年 中田荘星

私は「海外で ”生活している” 感覚を得たい」と考え、本プログラムに参加した。理由としては、その経験を通し、海外で生活していけるという自信をつけることで、今後の進路の選択肢が広がると考えたからだ。今までに何度か海外旅行には行ったことがあったが、観光ということもあり現地で“生活している”感覚は得られなかった。そこで、留学プログラムを選ぶ上で「1ヶ月以上の留学」「ホテル泊ではない」の2つを条件としていた。

プログラム中は「日本での生活でやっていることは当然のようにやる」ことを心がけた。例えば「レストランの開店時間を知りたいときや予約をとりたい際には、オンラインやメールでやり取りするのではなく、すぐに回答が得られるように電話をする」といったことだ。プログラムの序盤は、外国の方に話しかけるのに抵抗があり、またいざ話しかけても向こうが言っていることが理解できないことも多かったので、常に緊張した状態で生活していた。そのため、生活の中では意識して行動を起こす場面が多く、いつも通り生活している感覚はなかった。

しかし、生活にも慣れていき、プログラムの最後の週に入った頃からは日本と同じような感覚で生活できていたと思う。英語の能力の問題で会話がままならない部分も依然としてあったが、会話をする際に緊張することもなくなったし、生活の中で特に意識して行動することもなくなり、リラックスした状態でいられるようになった。以上から、自分が設定した目的は達成できたように思う。

留学を終え、英語力を伸ばしたいという気持ちが強くなった。所属している研究室の先生が、私が修士2年のときに退官されるため、今後長期留学をすることは難しい。しかし、もし現在自分が学部生で研究室に所属していなかったとすると、海外の大学院への進学や、長期留学のための大学休学なども検討していたと思う。私はこれまで、部活動に所属していた関係で留学に行くことができなかったが、留学を迷っている人がいたら、将来の選択肢を広げるという意味でもなるべく早い段階で留学に行くべきだと思った。

また、自分が予想していたよりもメルボルンを好きになった。正直なところ、プログラムに応募する際、場所は全く気にしていなかったため、メルボルンについて全く知らない状態で留学に行くことになった。しかし、プログラムを終えて、メルボルンで良かったと心から思う。CBDに行けば欲しいものは揃うし、トラムや電車に少し乗るだけで綺麗な海や大自然のある場所に行ける。加えて現地の人々も魅力的だった。ホストマザーや、事前学習でお世話になったデフェランティ先生をはじめ、多くのオーストラリア人が自分の国や街を愛し、何も知らない私に色々な場所を紹介してくれたのがとても印象に残っている。友人の中にも「将来は絶対ここに住む、永住を決意した」と言っている人がいたが、それも納得できるくらい素敵な街だったと思う。

修士一年 濱村肇

私はこのプログラムで、人生初めての海外を経験しました。正直、このプログラムの応募の締め切りギリギリまで、受講しようか迷っていました。その理由としては、修士の学生であり時間に余裕があまりなかったことがひとつ、またこのプログラムに参加するには、決して安くはない金額が必要であったことが最後までネックでした。しかし、一度も海外を経験することなく社会に出たくなかったことと、上手ではない英語でも外国人とコミュニケーションが取れるという自信がほしかったため、最終的には参加することを決断しました。

まず、このプログラム全体を通して感じたことは、オーストラリアでは、自分から口に出して初めて、変化が起こるということです。簡潔にいうと、自ら言わなければ、何も伝わらないし、くみ取ってもらえないということです。実際に、私が経験したことは、ホームステイ先の自分の部屋が朝夕は特に寒く、部屋の中であるにも関わらず厚着をしていました。しかし、ホストファミリーは特に気にするような素振りもなく、ほとんど意にも介してくれませんでした。入国当初は、自分のことで精一杯でしたが、自分に余裕が持てるようになってきたころ、私が一言、寒い朝夕にエアコンを使用しても良いかホストマザーに尋ねたところ、「だから、毎朝たくさん洋服を着ていたのね。」と笑われてしまいました。日本人は、文化上ホスト側がくみ取ってくれるのを期待しがちですが、オーストラリアでは違います。自分から口に出して初めて考えてもらえるといった文化で、軽いカルチャーショックを受けました。しかし、このような経験も日本から出なければできなかったことです。

次に、このプログラムで一番の収穫で、経験になった印象深い出来事は、留学した学校で友達が数人できたことです。モナシュカレッジに登校初日、勇気を出して研修校先の日本語クラブに足を運び、話し相手を見つけて話をしました。その人は日本語クラブのメンバーの一員であり、日本に興味があったので日本の話題で会話はすぐに弾みました。自分の英語力は低レベルであったため、相手には自分の英語をくみ取ってもらいながら会話をしたところ、初日で連絡先も交換する仲にまでなりました。また週末には、その友人にメルボルン観光を含めて、メルボルン都市部の案内をしてもらえたりもしました。さらには、日本に来たときは遊びにまで来てくれるといってもらうほど研修中に仲良くなり、今でも連絡を取り続けており、SNS上でくだらない会話を楽しんでいます。

最後に、色々と悩んだ末、オーストラリアに行くことを決めましたが、初めての海外ということもあり、自分にとってかなり有意義な経験を積めたと思います。また、自分にもっと英語力があればという思いを研修中にオーストラリアで感じる事ができたので、インデペンデンススタディー（個人勉強）を日本でし続けるとともに、自分のコミュニケーション能力向上に努めていきたいと思います。